
夢幻妖女

天中涼介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢幻妖女

【Nコード】

N7536C

【作者名】

天中涼介

【あらすじ】

魔界から人間界へと落とされた魔界人マミ。現代人間界で魔美が出会ったのは、凶悪な龍の血族。マミの活躍を描く冒険活劇。

第一話

あたしの眼の前に巨漢が立ちはだかっている。

そりゃ、もう、真っ赤な形相で、憤怒の面持ち。

赤鬼か？ そうでなきゃ、赤い瓢箪ひょうたんかね。笑えるねえ。

「魔美まみ。今日という今日は、どうなるか分かっておろうな？」

ドスのきいた低い声だが、地響きでも引き連れてきそうな怒りがこもっているのは、あたし以外が聞いたとしても確かだろ。

でも、怖いなんて思わないね。

馬鹿じゃない？

あたしは巨漢を真正面から睨み付けた。

こいつは、あたしの親父。生まれたときから怒られてるんだ。今更、赤鬼の真似したって大した事じゃないね。

ましてや、あたしは可愛い一人娘。怒ったって、小言のひとつくらいでいつもお終いなんだから、もったいぶって本気の振りしなくていいっての。

「わしが本気で怒らないと知ってる顔つきだな」

あたしがビビらないのを理解したのか、親父はふって溜め息で赤ら顔を白くした。

あつたりまえじゃんよ。あんたが今まであたしに手を上げたことでもあつたっけ？ 出来ないよね。可愛いもん、あ・た・し。う・ふっ。

「まあ、いいさ。わしが怒っても、お前に効き目が無いことは先刻承知しておる。だがな」

そこまで言って親父は言い淀んだ。

なんだよ？ はつきり言ったらどうなんだ？ 可愛い娘は怒れませんで。

「今回は、わしだけじゃないからなあ。お前、あいつのご機嫌取りなんて出来るか？」

おいおい、なんだよ。その哀れみの目線は。あたしは別に可愛そうな立場じゃないよ。どちらかといえは、晴れ晴れした気分なんだから。変な事言って不安にさせるなよ。

「はあ。溜め息しか出んな。お前、今回の事は、あいつが持ってきた話だぞ。今、先方に謝りに行つとるが、あいつに恥をかかせることになつとるが、それを承知でいるのか？」

なに？ 今、何か聞き捨てならんことを言つたか？

「ちょ・ちよつと、待て。あの話は、親父が持ってきたんだろ？」
我ながら情けない声が出た。

「なんだ？ 知らなかつたのか？ 馬鹿な奴だな。あいつの仕事場の同僚がな、年頃の息子さんがいて、どこで見初めたか知らんが、お前を気に入ったそうさ。直接も何なんで、あいつに相談がきたそうさ。わしの口から言つたのは、あいつからだとお前が断るにしても、気兼ねするんじゃないかっていう気遣いだったんだが。裏目に出たな」

にやつと笑うなよ。まったく。

そうと知つてりゃ、もうちよつとうまくやつたのに。

あたしはムクれて地べたに胡坐をかいて座り込んだ。

「でな、あいつから伝言でな、お前の今回のお仕置きなんだが…」

親父は、またもや言い澀む。

いいから言えよ。前は何だつて？ 半月の外出禁止と教科書一冊の書き写しだつたつて？ それ以上つてことは、今度は一ヶ月の外出禁止か？ 別にそのくらい大した話じゃないけどね。

「良く思い付くもんだ。お前も今度ばかりは命が掛かるぞ」

え？ 命つて、そんなハードな話なの？ 悪い冗談…なわけないか。あの人が考えることだ。悪趣味極まりないんだろうな。

つてことは、こうしてる場合じゃないつてことか？

「いやあ、なんたつてあいつの思い付くこととはいえ、はつきり言つて完全なサディストだろ。それがだよ…つて、おい！ どこへ行く！」

親父の話なんて聞いている場合かよ。あの人が決めた罰なんて、謹慎なんて可愛いもんじゃない。幽閉とか隔離とかに名前が変わるに違いないし、それすら可愛いかもしれぬ。

あたしがまだ十歳だった頃、自宅から何十キロも離れた山に捨てられたことがある。自力で帰って来れなきや許されなかつてんだから始末に悪い。十歳だぞ？ 山にや猛獣だつていたんだ。泣くにも泣けず、ただただ三日歩き続けて帰り着いてみりや、夫婦そろつて旅行に出てる始末。自宅の玄関で初めて泣いたね。

友達の家に泣き逃げ込んで五日。涼しい顔で帰ってきた両親に言つたね。『娘を放つて旅行なんてしないで』つて。そしたらあの人『あら、これも罰の一環よ』だつて。

十歳の子供に、そこまでするあの人、十六にもなるあたしに用意する罰は想像を絶することに違いない。

逃げねば、逃げねば、本当に命に関わるぞ。

あたしは長い廊下を一直線に駆けて、突き当りの窓を蹴破つた。派手な音があたしを追いかけけるように木霊する。

遅い遅い。破片が散らばるころには、あたしの身体は二歩も先を走つてゐるつての。

持久走に自信はないけど、ここから離れるくらいまで走る、イコール、あの人の手が届かないところまで逃げるくらいはワケない。今のあたしは十歳じゃないぞ。頭だつて相当に回るんだ。ほとぼりが冷めるまでは、友達の家でも回つて暮らすさ。

いつまでも子供だと思つなよ！

庭の雑木林を突つ切つて、道路にまで出る。このままじゃ、帰ってくるあの人が鉢合わせしかねないから、そこから外れて街道沿いの風防林に走り込む。下生えの草が邪魔臭いが、あたしの走る速度を落とすほどじゃない。

けけつ。悪いけど、スピードなら誰にも負けない自信あるんだよね。並みの足じゃあたしに追いつけませんつての。

風防林を駆け抜け、大通りを目指す。

いくらあの人だからって、人前であたしをどうこうしようなんて思わないだろ。なんせ外面だけは天使みたいなんて言われてるんだ。その仮面の下に悪魔より恐ろしい素顔があるなんて、家族以外には見せられないって。

今回は楽勝ですな、うぶぶ。

なんてことが甘い考えだっことに気付けないところが、あたしってまだ子供？

あの人があたしの考えてることを読めないわきゃないんだよね。とほほ。

だって、もう少しで大通りに出られる路地だっというのに。

居るじゃん。両腕組んで、モデル立ちして、斜め四十五度目線で、あそこに立ってんじゃん！

「あら、魔美ちゃん。奇遇ねえ、こんなところで会うなんて。何か急いでるのかしら？ 走ってきたみたいだけれど」
「って、白々しいこと言ってくれちゃうんだ。」

たぶん今のあたしってば、ものすんごく情けない顔してない？
てか、泣きそうな顔してない？ 親に見つかって怒られる子供が、泣きそうってのも当然でしょ？

「み、見逃してくれよ〜」

なんて情けない声で言ってみたんだが、無理だよな？

「うぶ、無理って知ってるんでしょ？ だったら、無理を通すこと考えたら？」

妖艶な笑みつてのは、この人の為にあるのかってくらい艶かしい。って娘に向ける視線じゃないだろ。

見つかつちまつたんじゃ仕方ない。三十六計何とやらだ。わかんない人は親か先生に聞いてね。

脱兎の如く踵を返して、元来た道を逆走して逃げる。

つもりだったんだけど、何故かあたしの足は空を蹴った。

しまったって思った時には、あたしの身体は半分まですっと落ち

込んだ。落とし穴かよ。なんとか穴の縁に掴まったんだけど、何これ？

必死になって腕を踏ん張って、頭までは脱出したんだけど、穴の底を見て二度びつくり。そ、底が無いやん！ 嘘でしょ？ 真っ暗な空間が底すら写さないうってんじやない。本当に底が無いの。薄く光ってるように見えるけど、それが底ってわけじゃなさそう。もっと、下があるんだろうと思える。

こんなところに落とされたらどこまで落ちるかわかんねえじゃん。冗談じゃないっての。

両腕に力を込めて勢いをつけて一気に上半身を穴から出す。はずだったのにいゝ。

あたしの眼の前には、ハイヒールの靴底が見えてる。で、あたしの頭に鈍痛ってことは、あたし、頭蹴られたのおゝ？

「往生際が悪いわね。観念なさい」

あたしの視界には小柄なハイヒールの裏しか見えないけど、あの人の声がある。きっと薄ら笑いなんだ。こんな状況で、この人が楽しくないなんてないもん。

「ちよつと、待って。こんなどこへ落ちるかもわかんないとこ嫌だ！」

必死の抵抗。虚しい抵抗だってわかるんだけど、そんなこたあこの際無視。隙を見つけて助かる算段しなきゃ。無理かもしれないけど。

「世の中には、いい加減にしなさいって言葉があるの。うふ」
うふって。うふって言うって蹴るのかよ。

ガンって音が耳の奥まで響いたじゃんか。でも奇跡だ。あたしの指は穴の縁に掛って、辛うじて落ちないで済んでいる。でも、喜びもつかの間なんだな。

「しぶといわねえ。そのしぶとさに免じて、今回は許してあげましょ」

穴の縁を覗き込むようにしゃがみこんで頼杖をつく仕草は、男な

ら参ってしまいそんな可愛さと色っぽさを兼ね備えているって思うんだろうけど、今のあたしは吐いたセリフが重要。

「やった、引き上げて。もう、落ちそう」

許してもらえるんなら、なんでもいい。この状況から早く脱出したい。

「なんて、言ったら喜ぶんでしょ？」

あっ？

「今回はね、さすがに無理ね。だって、このあたしが人前で頭を下げて謝ってきたのよ。こんな辱めは受けたこと無いわ。だから、しばらくあたしの視界から消えてくれる？ 出来れば一年くらい。気が向いたら迎えに行つてあげるから」

にこつて笑つて酷なこと言うな。一年も視界から消えろつて、追放つてことじゃねえか。あたしが、そんな悪いことしたのかよ。

「その穴の中は、人間界つてところに繋がってるわ。がんばつて生き抜いてね」

「ちょ、ちよつとまて〜！ 人間界つて、そんな…」

あたしの言葉は最後まで言えなかった。あの人の姿がすつと立ち上がったかと思うと、僅かに引つかかっていた指を爪先で弾いた。

「うふ。じゃあねえ」

妖艶と手を振る姿が遠ざかっていく。自由落下の途中であたしが叫ぶ言葉は

「かあさんのばっかやろう〜」

くらいが精一杯だったのは仕方ねえじゃねえの？

第二話

うーん、なんて言ったらいいのかなあ？ はっきり言つと「これが人間界？」てのが感想だけど、確かに変わつてんなあ。

とにかく植物少なくて？ 生きとし生ける者は植物の加護無く生きられないってのは、あたし達の世界じゃ常識だよ。生の根源と終焉を司る者でもあるんだ。

それが、どうよ。地面は変なもんで固められてるし、ひしめき合うように乱立する建物は真上に頭向けたつて、その頂上も見えないつての。山か？ 人工的な山なんか？ これを登ると人間は精神的に成長するのか？

それに、人間の数？ なんだ？ 祭りか？ あつちからもこつちからも、うじゃうじゃ湧いてくる。なのに、ただただ歩いて行過ぎるだけ。一方になら、そこへ行く途中なんだろうつて思うよ。でも、バラバラやん。つてことは、こいつら行く目的は別々なんだから。なに何でこんなに人が多いの？

はあ。こんな、わけわかんないところ、やだよ。

ぼやいても、帰れるわけじゃないけどねえ。どうやら、あの落とし穴は一方通行らしくつて、あたしを吐き出した後、綺麗さっぱり消えちまった。一瞬、力業ならとか思つたのは確かなんだけどさ。この人間界。何かと曰く付きでさ。

そうか。とりあえず、あたしが居た世界と人間界について話しておかないと混乱するよね。でも、ちょっと長くなるんだよねえ。うざかったら、適当に割愛してよ。うふ。

あたしが先刻落とされた。もとい、追放された世界。そしてあたしが追放された世界。それ以外にも世界はある。これ、あたしが五歳で教えられたことだから、しっかり聞いてね。

世界は、言ってみれば紙一枚で遮られたようなもので、見えない

だけで存在はしているのね。仕切られた部屋の中で、ドアを開けて外に出ると別の部屋。そう考えると理解できるかな？

世界は、今の段階ではい五つに区分されているっていうか、確認されてるっていうのが本当かな。あたしが居た世界が『神聖魔界』、それ以外に『天上真界』、『鬼神界』、『精霊界』そして『人間界』ってのが今の常識。

説明は得意じゃないんで、かいつまんで説明するけど、さっきも言っただけどうざったかったら飛ばしてね。

まず『神聖魔界』。あたしの居た世界だけど、創始者は“サタン様”って人だといわれてる。なんせ数千年以上まえの人なんだから、定かじゃないし記録も曖昧なんで、あたしの想像では都合よく作られた寓話だろうね。そんでね、あたし達って魔力っての使って日々暮らしてんのね。身体を使わないで物動かしたり、曲げてみたり。そんな力の優劣で仕事が決まってみたりする訳よ。あたしが足速かったりするの、その力のお蔭が半分以上あるってこと。まあ、いいや。

次『鬼神界』。ここは、一般に“鬼”っていわれる人が暮らしてる。頭部に角があつて、それが一本だったり二本だったり五本の奴もいる。魔力は弱いんだけど筋力は半端ないくらい強い。普通の女の子が、自分の五倍はあるうかつて岩持ち上げて、十メートルも飛ばすなんて簡単なこと。だからって怖いのかっていうと、これが人の良い奴ばかりでさ。宴会好きなんだなあ。何度か行ったけど、必ずどこかで宴が開かれてる。例えば別の世界の奴でも関係なく仲間に入れてくれるんだな。あの果実酒はうまかった。また行きたいねえ。えっと『精霊界』。ここは、身体を持たない人が、基本的に暮らしてる。基本的ってのは、そういう奴が多いってことと、身体を持つことも出来るってこと。説明に難しく、巧く表現できるかも心配だけど、普段の姿は透明で、本人が見せようとしてくれない限り見えないのよ。でも、物に憑依することが出来る。その辺の石ころにもなれば、あたしの中に条件さえ合えば入り込める。そんな時は

見える、つてか動くから分かるだな。意思の疎通は、特殊な精神感
応さえ出来れば誰にでもできるんだ。ただ、見えないことをいい事
に悪戯しまくるんで腹立つけどね。

厄介なのが『天上真界』。本当は説明しなくてもいいかなつて
あたしは思うんだが、学校の先生によれば、世界の発現はここから
始まった、らしいから説明するけど。なにしろ気に食わない連中の
集まりだ。で終わりたいけどそうはいかないよな。一言でならエ
リートの集まりつてか、差別意識の民族最上主義？ 自分達以外は
下賤の者かなんか言っちゃって蔑んでんの。それだけでもムカつく
のに、魔力に関してはあたし等なんか足元にも及ばないんだなあ。
あらゆることを記録してる“真界書”つてのがあって、全ての世界
の創世から現代までが記録されてるらしいが、見た人がいないんだ
から眉唾もいい所だと想像してるけどね。

あああ、次が『人間界』なんだけど、はつきり言つてわかんない
事ばかりで、あたしも知り得ないつてか、知る手段が今まで無かつ
たんだよね。実は『人間界』とは不可侵条約みたいなものがあるら
しい。らしいつてのは誰も今まで確かめた者がいないこともあるん
だけど、その記録は『天上真界』にあつて、誰にも触れられないよ
うに厳重にしまい込まれてる。だから、あたしが学校「魔学会」で
習った程度で語れるのは少ない。

今から数千年前、『人間界』にソロモンつていう一国の王様が
いたのだけれど、その男は世界の四大元素を全て解き明かしたといわ
れている。これは、世界の根源に関わるもので、それが世界を支え
てるんだけど、それらは自然発生的なもので、それ自体をどうこう
することなんて出来ないつていわれてきたのね。ましてや、その解
明なんてインテリ軍団の『天上真界』の学者さんでさえ不可能。四
つのうちのひとつも解けない。それを全て解いたのが人間で、それ
も過去の遠い存在つてのは、お偉いさんには非常に面白くないんだ
ろうね。

そのソロモン王。解き明かしたばかりか、それらの力を自由に使

えたっていう話。伝説的な逸話になってるから。そして、その力を駆使して『神聖魔界』の実力者「ベリアル」を手下のように使い、栄華を極めたって話。そのソロモン王。何故か突然に不可侵条約を各世界に送りつけてきた。正確には一方的な絶縁書、鎖国宣言書みたいな内容だったらしい。写しくらいは教科書にも抜粋されてたんだけど、大半は忘れたわ。ひとつは『人間界』で魔力は使えないってことが原則。使うと身を焼かれるだの切り刻まれるだのってことらしいんだよね。

出入り口も塞がれてしまっていて、今、もし見つけたとしても、役所の連中が眼の色変えて塞ぎにかかるって代物。故に、行けない世界ってことで、学校でも触り程度で流して、そんなところもあるよってな感じ。

が、なんだ？ あたしは、来ちまつてんじゃん。

何の予備知識も無いんだぞ。そんなんで魔力使ってはいけませんって、どういうこと？ 飯もろくに食えないじゃん。ってか、既に腹減ってただけどなあ。

でも、これっておかしくないか？ ここって『人間界』なんだろう？ それでいて、この自然の無さ。ソロモン王は四大元素解明したんだろ？ だったら、もつと自然と調和した世界になっただけやかしいんじゃないか？ それがどうだ？ 地面固めて、植物なんて変な箱が唸り上げて走る道の脇に、肩身狭そうに生えてるだけじゃん。おまけに貧弱そうだよ。あたしでもへし折れそう。

あああ、うるさいって思ったら、何だあのでっかい芋虫みたいな？ 腹ン中に人間が見えるってことは、あれに食われたのかな？ すっごい数食ったんだな。中で人間がひしめいてる。あたしも食いてえ。って、食欲に繋がるってことは、そうとう腹減ってんな、あたし。

そうだよな。あたしが親父に怒られてたのが朝で、朝食前。んで、母さんに落っこたされたのが、そのすぐ後。妙な狭い扉の前に落ち

たと思つて、あちこち彷徨つてみた結果、自然というものが皆無の町みたいってのが理解できたわけだ。お蔭で、今や夕暮れ。一日、食つてない。そりゃ、腹も空くつてもんだよ。

旨そうな匂いは、あちこちからするんだけど、人間観察の結果、何やら紙切れが無いと物が手に入らないシステムみたい。あたしが持つてるわけないし、木の実でもあれば、しばらくは何とかなるはずなんだけど、こんな町じゃ無理難題だし、寝るところさえ無いあたしって…。

ぼやいてばつかだなあ。ってか、ぼやく以外することもないんだけどね。

「彼女。こんなとこで座り込んで、どうしたの？ もう一時間にもなるよね？ 待ち合わせに失敗しちゃった？ 少し、時間いい？」

ぼくとしてるあたしに、たぶん話し掛けてるんだよな。捲くし立てるように疑問符いっぱいだけど、あたしは答える気なんかないかな。落ち込むわ、腹減るわ、宿無しだわ、いっぱいいっぱいだったの。

「あつれ〜？ シカトなの？ 傷つくな〜。僕って、そんなに悪い風に見えないでしょ？ ほらほら、カメラも持ってないし、紙袋も持ってない。黒いスーツも着てないし、強面の傷があるわけでもなし」

あああ、うつとしいなあ。出来ればそつと落ち込ませてくんねえかな。一応、背中を丸めて、膝を抱えて、そんな顔に顔を埋めて、完全拒否つて感じを出してみたんですけど。

「あれあれ？ どうしたの？ もしかして泣いてる？ どうしたの？ 何かあった？ 彼氏に振られた？ それとも、どっか痛い？」

って、余計にうつとしいわ！ イライラさせんなよ。余計に腹が減る。

「え？ なんだ、お腹空いてたんですか？ それならそうといつてくれれば。さあ、行きますよ。たっぷりご馳走しますから」

あれ？ あたし無意識に口に出してた？

話し掛けてた男は、あたしの手を引いて立ち上がらせると、そのままスタスタ歩き出しちまった。ちよつと、待てよなんて言えない強引さ。ちよつと、危ないか？ あたし。

フラフラの身体なのは空腹が限界なのかな。一日くらい暴れまわっても大丈夫な位の体力はあるつもりだけど、それは腹が減ってないのが条件ね。うゝ、魔力使ってしまった。けど、今となつてはそれすら命取りかなあ。

とりあえずは、あたしを連れて行こうとする男くらいは確認しとこう。

背は、あたしより少し大きいくらい。でも、大差無いな。太っているようじゃないな。どちらかといえば華奢な方じゃないだろうか。服に隠れて身体は見られないけど、“鬼”族みたいな筋肉隆々つてわけでもない。あたし達に近い種族なのかもね。髪は黒くてふわふわした感じがあるね。ありや？ 顔つきも悪く無いじゃん。二枚目っていうには何か足りない気がするけど、気に入らない顔じゃないかな。

なんて観察してるうちに、こいつはあたしをデカイ建物の中に導いた。

入った瞬間の第一印象は、とにかくデカイ音に耳が悲鳴を上げた。うるさいくらいの音量じゃない。音楽なんだって気付いたのは、奥のテーブル席に座ってからだった。これは、何かの攻撃か？ でなきや、ここの住人はかなりの難聴なんだろうよ。

「今、売り出し中のバンドらしいです。今日は特別ディナー付きライブとかで、今日を最後にメジャーデビューするらしいですよ。食事はバイキング形式なんで、好きなもの食べれますよ」

うるさい音量の中、男が口をあたしの耳元まで持ってきて喚いた。話の大半は理解不能だけど、とにかく飯が食えるってことだよな？

じやなきや、お前の頭を魔力で半分に縮めてやる。

「あ、僕が取って来ますね。待っててください」

って、走り去ってしまったかと思ったら、五分としないで戻って

来た。

「これが、前沢牛のステーキだそうで、こっちがアサリの Pasta ですよ。鴨肉のソテーにキングサーモンのムニエル、サラダに蟹肉とセロリの和え物だそうです」

両手に皿を抱えて帰ってきたと思ったら、またぞろ理解不能のオンパレード。でも、おいしそうな匂いだけはわかったよん。

「く、食っていいの？」

「え？ あ、どうぞどうぞ。そのために持って来たんですから」
ではでは、遠慮なくいただきますでしょうか。

「いただきます」

両手を合わせて、全ての生き物に感謝と慈愛と弱肉強食の教えを。とりあえず、僕の自己紹介ときますね。名前は慎一郎しんいちろうです。仕事は、なんていうか自由業ですかね。って、聞いてます？

あ、ちよつと、何故にステーキを手掴みで。ちゃんとナイフとフォークがあるじゃないですか。そ、そんなに急いで食べなくても、まだ沢山ありますから。いや、ソテーのソースがこぼれてますって。アサリの殻は出さないと歯が折れますから。ああ、なんでも詰め込めばいいもんじゃありませんって」

うつるさいな。黙って好きに食わせる。でも、中々うまいじゃん。腹減って死にそうだったことを差し引いても、かなり旨いんじゃない？ 『人間界』侮り難し。

「もつと！」

これじゃ、全然足りない。あたしの胃袋は、これの十倍は欲しいっていつてるんだ。

「わ。わかりました。取ってきます」

わけのわからん呪文料理を次から次へとたいらげて、五度目に慎一郎に取りに行かせた頃だったろうか。

変な空気が、馬鹿デカイ部屋の中に流れた。人間は百人ほどだろうか。ぎゅうぎゅう詰めじゃないけど、それなりにひしめき合っていた人々が、小波のようにどよめき出した。

今まで耳をつんざくような音量の音楽が徐々に途切れていく。と同時に壇上にいた一人の男が、奇声を発したかと思うと、人垣に飛び込んだ。

何かのパフォーマンスかと思ったんだけど、そうじゃなかった。

床に倒れこんだ男は、自分の胸を掻き毟るかのような動作を繰り返して、絶叫を搾り出すと反り返るように頭と踵で状態を支えた。次の刹那、真っ赤な霧が一面を染め上げた。

男の胸が裂けて、体液が辺りに四散したためと理解したのは、人込みが悲鳴と怒号で散り散りになって逃げ出した頃だった。

人間って、こんな死に方するんだと感心しかけたが、逃げ惑う人々の様子からして、これはあたしの間違いなんだろうなあ。ってか、慎一郎遅いんですけど。

つづく

第三話

「マミさん、逃げますよ。こんな場所に居ると、警察が来た時面倒ですから」

慎一郎の奴、手ぶらで帰ってきた。と、思ったら、ここへ来た時同様にあたしの手を強引に引っ張って、さっさと建物を後にした。

ああん、あたしの飯。まだ、食い足りないのに。

建物の出口付近は、逃げ惑う人々で右往左往の大渋滞だったが、慎一郎は器用に人並みを掻い潜り、あたしを連れて建物を出てしまった。

スムーズに人並みを分けて走った慎一郎に比べて、あたしときたら引っ張られるを良いことにあつちこつちにぶつかりまくってたから、あたしを連れてなきや先頭の方に出られたんじゃないかな？こいつも少し侮れないか？

パポパポいう箱物が赤い光を発してやって来ると反対方向に導かれ、あたしは慎一郎の後に着いて行った。ってか、まだ引っ張られてんだから着いて行くんじゃない、引きずられてただけだね。

後ろを振り返ると、人の塊が出来つつあった。どこにでもいる物見遊山人だからなりなんだろうなあ。それはどこの世界でも一緒だよな。何かあれば見てみたい好奇心は誰にも止められないし、それが他人の不幸なら一層蜜の味だしね。

どのくらい離れたらう。建物をぐるぐる回るかのように慎一郎の奴引っ張って行くからわかんねえよ。ただ、そう大した距離じゃない。慎一郎はハアハアしてるけど。ヤワだねえ。普段の運動不足がモノをいうんだよ。笑っちゃうよん。

人通りは先刻よりは少ないけど、それでも行き交う人間が途切れない場所に連れてこられた。あたしには何処なのかわからんけど、慎一郎は大きなガラス張りの建物に入った。勿論、あたしも連れて

つてか、いい加減に手、離してくれないかなあ？ だいぶ汗ばんできてて、気分的にイライラすんだけど。

「いらっしゃいませえ。ご注文をどうぞ」

なんて言うおねえちゃんがにこやかに迎えてくれて、それはそれで嬉しいけど。その張り付いた笑顔は何とかならんもんかね？ 見せ掛けつてのが丸分かりでキモイつての。

「僕は、コーヒーを。マミさんは、なんにします？」

え？ なに？ また何か食わせてくれんのか？ そういえば何やら旨そうないだよな。

「いいのか？」

つて聞いたただけだけど。嫌だつて言つたつて食うけど。

「どうぞ」

なんてにこやかに慎一郎。

「じゃ、ぜんぶ」

「は？」

つて声は二重奏だったか？ 慎一郎と向かいのおねえちゃん。聞こえなかったか？

「ぜ・ん・ぶ。うふっ」

一応、最後は可愛くしてやったぞ。どうだ、今度は聞こえたる？ 「いえいえ、全部は食べられませんし、そんなにお金ありませんから」

なんだよ。どうぞつて言つたじゃん。ウソツキだな。

「あ、僕に任せてください」

だつたら最初からそうしろつての。期待させるだけ罪だつつうの。お盆の上に載せた紙包み二個と紙のコップ二個を持って慎一郎は階段を昇り、二階のテーブルが並ぶフロアを眺めて、先程のガラス張りの壁面に取り付けられたカウンターに座つた。必然的にあたしはその隣に座る。だつて、慎一郎があたしの食い物を持つてんだからしかたないだろ？

「びつくりしましたね、マミさん。あんなことが眼の前で起こるな

んで、きつと一生に一度ですよ。あ、はい、ハンバーガー」

そう言っただけであたしに紙包みを手渡した。これは、良い匂い。あつたかいし、いったただきまゝす。

「あゝあ、マミさん、包みは取らないと。紙は食べられませんよ。

あ、全部取ったら、ほらソースが服に垂れますって。ナプキン、ナプキン」

ほんと、あたしが何か食うとうるさいよな。でも、旨いねえ。ふんわりで香ばしくてジューシーであったかい。ウマウマ。

もつと！

「え、もう食べたんですか？ はい、今度はてりやきです」

ほほう、種類があるんだ。今度は香ばしさの中に甘味があつて、それでいて絶妙な塩加減。これもイケる。うふっ。人間界つてのも悪くないかも。つてか、食べ物に限りだけどね。

「マミさん。僕の話、聞いてます？」

ありや？ まだ、喋ってたんだ。はは、わりい、夢中だったわ。

「うるさい奴だなあ。物を食べる時は、喋らないつてのは常識だろ。

……それに、白々しいんだよ。お・ま・え・は」

慎一郎が飲もうとしたコップを奪い取り、あたしは自分の口に運んだ。慎一郎が小さく「あ」なんて吐き出したけど、お前がまだ口付けてないのは確認済みだつてえの。つて、にが！ なんだ、こりや？ 毒か！

「そ、それはコーヒーですから。マミさんの、こっちのオレンジジュースです」

先に言え。にげえ。

「大丈夫ですか？ でも、僕が白々しいとは、心外ですね」

けっ、オトボケか？ そっちの方がよっぽど白々しいつての。

「お前、あそこで何が起こるか知ってて行ったんだろ。あたしを連れて行ったのはどうか知らないが、あのタイミングといい、逃げる速さといい、廻りがあれだけうるたえる中、冷静な判断なんて出来る奴は、それだけで疑わしいね」

ほんとはそれだけじゃないんだけどね。今はこの男が信頼できる存在じゃないってことが分かった以上、それ以外を話すことはない。ちよつときよとんとした顔した慎一郎。すぐにニコツッとして「さすがですね」

だ。

なんだそりゃ？ 馬鹿じゃないの？

「実は、マミさんもご存知かと思いますが、連続爆弾殺人の現場というわけです」

「ばくだん？ 連続とか殺人とかはわかるが、ばくだんって何だ？ 今月に入って八人目の犠牲者です。警察も捜査に行き詰ってしましてね、人間の体内に爆弾を仕掛けて、時間なかりリモートコントロールかはわかりませんが、内臓を爆発させて殺すなんて悪趣味極まりない」

仕掛けるってことは？

「つまりは、人間の身体の中に何か入れて、それがポーンってなつて死んじゃったと」

「そういうことですね」

「待てよ待てよ。おいおい、人間ってのはそれほど馬鹿なのか？ じゃなきゃ不感症か？ はたまた無神経？ これは違うか。」

「人間って、そんな物、身体に入れられて何とも思わない生き物なのか？」

「まさかあ。でも、鋭い考察です。警察が悩んでるのもそこです。人間の体内に入れるって行為は手術でもしない限り無理ですよ。ですけど、犠牲者の中に手術痕があった奴はいません。死亡する寸前までホテルで情事の最中だった人間もいるんで、それは間違いないと思います。では、どうやって爆弾を体内に。飲み込んだにしても、あれほどの威力です。かなり大きいものはずです。飲み込めるものかどうか。それに、爆弾の破片も見つかっていません。痕跡も無くなる爆弾なんて、そもそも存在するんでしょうかね」

あたしに聞くなよ。この世界のことなんて知るか。」

「でも、お前、あそこであいつが死ぬって知ってたんだろ？」

「じゃなきゃ、あのタイミングは合わせられないだろう。って言葉は飲み込んだ。こいつには、まだ奥がある。」

「知りませんよ。なんて言っても信用されそうもありませんね。知ってました」

「やっぱりな。こいつ、かなり食わせ者かも。」

「お前、同じ人間が眼の前で死ぬって知ってて、黙って見捨てたのか？」

「そんなに睨まないでください。知ってたっていても、あそこで誰かはまでは特定出来てなかったんですから。本当ですってば。情報がありましてね、今日のおの時間、あそこで連続爆弾殺人が起るってね」

「にこつて、お前。はあ、溜め息が出るわ。」

「でも、実際に見た感じですけど、爆弾ってわりには火薬なんかの爆発音も火薬臭もありませんでしたし、確かにこう、内臓がバンてな感じで破裂してましたけど、火傷の跡も無いんですからねえ。本当に爆弾なんでしょうかね」

「そう言つて腕を組み、難しい顔をする慎一郎だけど、考えてるんだかふざけてポーズだけなのか。まったく、読めん男だ。」

「ただ、あたしなりにも思い返してみた。苦しそうに悶える男が、胸を掻き毟った後に起こった破裂の瞬間を。」

「なあ、慎一郎。お前、あの男が破裂するところ、ちゃんと見たか？」

「え？　そうですね、見ましたよ。あのステージから飛び降りるあたりから見てましたから、ほぼ一部始終でしょうね」

「うーんと上目になって考える慎一郎ではあるけど、どこまで本気なんだか。」

「だったら、あの破裂の瞬間、何か見えなかったか？」

「は？　何かつて、何ですか？　まあ、血の飛び散りようは酷かったですけど、これと違って何も見当たりませんでしたよ」

そうかな？ あたしの眼が変だったのか？ いや、違うと思うな。慎一郎の眼が悪いんだ。もしかすると人間の眼が悪いとか？ それに、魔術を使っているような感じがしないってのは、魔術を使えないのは、あたしだけじゃなくて、人間もってことか？ うーん。「マミさん。何か気付いたんですか？ 出来れば教えて頂けませんか？」

魔力って世界共通だと思ってたんだけどなあ。便利なものなのに、何で人間は使わないんだろ？ ってか、そんなこと考えてる場合じゃないか。

慎一郎があたしを期待の眼差しで見てる。気付いたよ。ってか、見えたよ。うふっ。

教えてやらないわけじゃないけどね。その前に、慎一郎。お前には、聞かなくてはならないことがあるんだなあ。

「慎一郎」

「はい？」

「はは、無邪気な顔だな。」

「この、てりやきつての、もっと食べたい」

「ありゃ？ は、はい。買って参ります」

肩透かしを食ったみたいにズッコケて見せたけど、すぐさま立ち上がって行くところなんて下僕に相応しいと思えるねえ。でも、それだけじゃないんだじえい。

「なあ、慎一郎」

走り出しそうな背中に、あたしは意地悪く声を掛ける。やっぱりズッコケるか。

「はい？ まだ、何か？」

「何かあるんですよ。」

「お前、あたしの名前、どうやって知った？」

「慎一郎の顔色が面白いように白んでいく。」

「ただで済むと思うなよ！」

UJU

第四話

「まさかとは思うが、この期に及んで白々しい真似やとぼけた真似はしないだろうな？」

あたしは斜めに俯く感じで上目遣いで慎一郎を睨みつける。こうすると釣り眼がちなあたしの眉間に皺が浮き出て、物凄く怖く見えるらしい。まあ、それを知ってるからこそやるんだけどね。

けけつ。タジタジってな感じで両手をフルフルさせてやがる。でも、それもポーズだろ？ 今までの感じからして、これくらいでうるたえるような奴かよ。

「な・なんのことでしょう？ あれ？ マミさんって自己紹介してませんでしたっけ？」

おいおい、言ったそばからそれかよ。とぼけた真似すんなって言ったぞ。

及び腰でイヤイヤしてるみたいな慎一郎が、突然向かいのテーブルを吹っ飛ばして壁まで滑っていった。まあ、あたしが蹴り飛ばしたんだけどね。

「正直に答えなよん。叱つたりしないからさん」

ニカッって笑ってあげたけど、あれ？ 聞いてねえし見てねえか？ 白目剥いて泡吹いてら。ってそんなことでごまかし切れるなんて思ってるところが、これまた甘いんじゃないかね？

「そんな真似してると、死ぬまで蹴るぞ」

「い・ごめんさい！」

ほらみる。まったく、芝居が浅はかなんだよ。血反吐でも吐いてのたうつくらいなら信用しないでもないけど、それでも結果は一緒だけどねえ。白状するまでは痛め付けるんだから。うふつ。

「言います、言います。言いますから、もう、乱暴しないで」

最初から、そういう態度なら乱暴なんかするか。ってか大袈裟だろ。

あ、その前に
「テリヤキつての後五個」

「実は、ママさんのことは、今回の依頼があつた時から知らされました。というか、ママさんを伴つてあの店に行くようにという依頼だつたんです。強引なやり方でもいいから、あの場所に連れて行くことが条件で、その後のことも指示されてます」

あたしはテーブルにあと三つになったテリヤキを一気に食つか迷っているのに、慎一郎は床に正座して上目遣いで話してる。別にあたしがそうしろつて言つたわけじゃないぞ。勝手にしたんだかな。でも、下僕としては当然の格好だけだね。

「そいつがあたしの名前、知つてたわけか？」
「ですね」

つて慎一郎は答えるけど、それっておかしくないか？
あたしつて今日の午後、この人間界に来たんだ。この人間界で誰があたしを知ってる？ 何千年の間、人間界に来た他世界の住人はいないはずだろ。

「そいつつて、だれ？」
当然の質問に慎一郎は腕を組んで考え込んだ。こいつ、まだ躰が足りないってか？

「いやいや、話さないわけじゃないんですけど」
あたしが左足を軽く上げただけで、慎一郎はアタフタと両手を動かした。それでも正座を崩さないつてのは褒めてやるか。

「一応、僕も探偵の端くれなんで守秘義務つてのがありまして、僕から話すつてのは問題あるんですが、今回は依頼者がママさんに会いたいつて言うんです。それが、この後の指示でもあるんです」

言つてることが良く分からんが、あたしに会いたいつてのはわかつたよ。

「つまりは、あたしを連れて、あのふざけた出来事を見せろつて指

示だったと。んで、その後にあたしに会いたいと」

「そういうことです」

なんだか回りくどいけど、あたしを知ってるってのは、何かしらあるってことだよ。もしかするとこの世界での出口くらい知ってる可能性もあるってことでしょ。

会わないわけにはいかないってことでしょ。

「いいよ。会おうじゃないの」

「助かります。もうすぐ約束の時間なんですよ」

何？ ってことは、あたしがこうして気付いていなかったら、慎一郎の奴、なし崩しにあたしを連れて行ってたってことか？ このやろう。

「会いに行ってもいいが、その前に、テリヤキもう十個買って来い」

慎一郎が歩く後ろを、のろのろと着いて行くのはいいが、何やら暗がりに近づいているのは気のせいじゃないよな。

今までは煌びやかな明かりがガラガラした場所で、夜なんだか昼なんだか分からなかったけど、ここいら辺りはちゃんとした夜の空気が寒々と漂ってる。廻りにも木々が多く、僅かだが空気も正常化してるようだ。ただ、完全に清涼とは程遠いね。臭いやら煙いやら、鼻はムズムズで皮膚にまとわりつく空気はベトベトして気持ち悪い。ほんと、人間界って異様なところだ。

「あそこの公園です。少し遅れたかな？」

あたしを振り返って行く手を指差す慎一郎だけど、なんか変じゃない。何ってことないんだけど。

公園って言われたところは、それまでと違って鬱蒼と茂る木々の呼吸が感じられた。暗くて良く見えないけど、恐らくは森のようになってるんじゃないだろうか？ 密集してるって感じ。それらが賢明に廻りの浄化をしようと必死になってるようだけど、そんな必死の活動も虚しい感じに思える。この場所を守るのが精一杯ってのが

本音なんじゃないのかな？ 可哀想を通り越して悲壮って感じだね。その森に入り込んで僅か数分。

「このあたりなんですがねえ」

なんてのん気な声で廻りを見渡す慎一郎だけど、あたしはその傍までは行けなかった。

「どうかしたんですか？ マミさん」

あたしに向かって怪訝な顔する慎一郎。そりゃ怪訝にもなるよな。あたしってば、慎一郎に向かって進むどころか、ジリジリと後ずさってるんだから。

けど、仕方ないってもんだ。あれって、なに？

ちようど慎一郎がいる辺りから、まるで透明な壁でもあるように見える。いや、見えない。感じるってのが正解。それは、地面から垂直に空まで続いていて、とてもあたしが越えられるものじゃない。慎一郎は無事なただけだね。

だけど、あたしには感じるんだ。これに触れたらあたしの身体なんて粉々になっちゃう。なんて言えればいいんだろう。風の壁っていうのかな？ でも、今は風じゃないんだけど、何かの切っ掛けがあったらきつと千枚の刃物になって襲い掛かってくる。

「マミさん？」

おいおい、近づくんじゃないよ。ほら、お前と一緒に動いてくるじゃん。おっそろしくて近づけないちゅうの。

ここは逃げた方が良くないかって自問したところで、不意にその壁は消失した。と同時に

「ほっほっほ。これが見えるとは、かなりなものじゃな」

なんてしわがれた声が慎一郎の後ろから聞こえた。

「ああ、お待たせしました。彼女がマミさんです」

慎一郎が振り返って、声の主を確認すると笑顔で迎えた。あたしもその主を確認する。

小柄なおじいちゃんが、黒いローブを頭からすっぽり被って立っている。背丈は慎一郎の半分くらいと思うけど、腰が曲がっている

せいだとすると少し低いくらいかも shouldn't。ただ、顔は確認できないなあ。暗闇に黒いローブじゃ輪郭すら怪しい。

「よく来てくださった。非礼はお詫びしますぞ。なにせ物騒な世の中ですからの」

いくら物騒っていつても、このおじいちゃんに比べたら可愛いものじゃないか？

お気楽な慎一郎は、何を言われているのかも理解できてない顔だし。

いいか。いかな魔力の持ち主といえど、その力を発揮するには何かしらの前兆や触媒が必要なんだ。なのにこのおじいちゃん、何の力の脈動も無ければ、触媒になるようなものも持っていない。ってことはだよ。自然にあの風の壁を作っていることになる。そんなこと出来るのって、どの世界でも聞いたことない。

「お若いの。出来るならば、このお嬢さんと二人で話したいのじやが」

「あ、はいはい。秘密の相談ですね。いいですよ。僕、その辺ブラついてきますんで、終わったら呼んでください」

おいおい、慎一郎くん。あたしをこんな得体の知れないじいさんと置いて行く気か？ 冗談じゃないぞ。勘弁しちくり。

スタスタと背中を向ける慎一郎の追いつがろうと足を浮かせかけて、あたしは身動き出来なくなった。

ん？ って顔で振り返った慎一郎だけど、あたしが動かないもんで、肩をすくめて又もスタスタって。おゝい。

慎一郎じゃわからないか。あたしの足の下、本当に足の形に下が小指の幅くらいに盛り上がった。動けば何かするぞ！ 的な感じが満々だったの。動けねえ。

慎一郎の背中が、暗闇の木々に消える頃、じいさんは話し出した。

「魔界の裁定者、ルキフェルの子よ」

ありや？ 親父を知ってるの？ 確かにあたしの親父はルキフェル。神聖魔界の裁判長だよ。ってか、そんなことどうでもいいから、

この足の下、何とかならんか。

「マミというそうだが。お嬢さんには、この世界の若者が死ぬところを見ていただいたわけじゃが、どう見えましてかな？」

にっこりと笑って：「いるんだらうけど、ロープのお蔭で見えやしない。とにかくそんな声音なのは間違いない。」

「そ、それに答える前でも後でもいいから、この足の下、なんとかしてもらえるのかな？」

そう言った途端にズリツと、もう一押し下から来た。足の裏、土踏まずの辺りに盛り上がる感覚。これは、恐らく答え次第では、このままあたしの身体を突き破る気なのかも知れない。泣ける。つてか、泣くぞ。

「ありやりや、済まないことをしたの」

忘れてたみたいいな声だったけど、あたしには心底恐怖の体験なんだけど。

じいさん、ロープの中から右手を出すと、軽く横に振った。と同時にすつと足の裏に引く感覚があった。

ほっとしてるあたしに、じいさんはロープを顔の部分だけ剥いだ。しわくちやな顔が見える、かと思っただが案外ツルつとした顔立ちで、髪は白髪なもののフサフサだ。くりつとした眼が可愛い印象すら受ける。

「さて、さっきの質問の答えを聞こうか？ あの若者の死に様。どう見た？」

ま、開放してくれたんだから答えてあげますか。

「あれは、あの男の中から、小さい蟲むしが飛び出してきたように見えたけど」

ほほうと感嘆する小さい声がいさんから漏れた。

そっぴゃあ、慎一郎には見えなかつたんだっけか。あたしの中であの時のシーンがスローモーションで蘇る。胸が裂けた瞬間、飛び散る肉片と体液に混じって、爪の先より小さいものがうごめきながら四散して、そのまま壁を通り抜けて消えて行った。あれは、一種

の寄生虫だと考えられる。

「やはりそうであったか。いやあ、わしが確かめたかったが、相手も巧妙だな。わしの前では姿を現さん。それでお嬢さんに頼んだわけなんじゃ」

今、つらくつと妙なこと言つたる。聞き逃したりしないよん。

「頼まれた覚えはないんだけど」

「おおお、これはしたり。済まなかった。あの若いのに説明はしてなかったの。しかし、巧く相手の正体は掴めたんじゃ。良かった良かった」

うんうんじゃないつての。あたしは納得できないつての。

「だいたい、じいさんの正体の方が、あたし的には問題なんですけど」

「わしの？ わしは、単なる老人じゃ。ああ、腰が痛い」

わざとらしく腰を摩るなつての。

「ただのじいさんが、あたしを細切れにしようとしたり突き殺そうとするかよ。それに、その腰も。無理に曲げてたんじゃ身体に悪いよ。か弱いじいさんの振りするんなら、もっとよぼよぼしなくちゃな」

じいさんの動きが止まった。凶星つかれて焦ったのかと思いきや、急にあたしの回りに先程の風の壁が降りてきた。いや、違う。最初からここにあつたんだろう。それが何かの切っ掛けで動き出した。あたしさえ感知出来ないようなやり方で。

ゆっくりとたわむようにあたしの周囲で風が動く。まるでねつとりとした水のようにだが、確かにこれは風なんだ。それが次第に縮んでくる。

あたしの手が少しでも持ち上がれば、指ごと持って行かれる距離まで縮んだそれは、あたしの髪の毛数本を浮かび上がらせ、ちりじりに吹き飛ばした。

あああ、もう我慢ならねえ！

あたしは両目をぎゅっと閉じて、両手に握り拳を作って力を込め

た。あたしが魔力を使う第一段階。

途端に不穏な空気が頭上で集まりだした。嫌な予感で目を開けて上を見上げてみれば、背筋が凍る光景だった。

ゴロゴロと雷鳴轟く黒雲が、あたしの真上で渦を巻いて、時折遠くから光を中心に集めているじゃないか。

こ、これは人間界で魔力を使うと身を焼かれるっていうやつか？ まだ使っていないけど、使おうとしただけで駄目なんですかあ？

万事休すってこのことか？ 周りは逃げられない風の壁で、魔力を使って逃げようにも上から雷が降ってくるんじゃない、あたしには成す術なし。諦めましょう人生を。って、無理でしょ！ なんとかしてえ。

「しん…」

「いかにいかに。止めなさい止めなさい」

じいさんが慌てて両手をバタつかせた。途端に無くなる風の壁。頭上のゴロゴロは、あたしが魔力を使うのを放棄してから勝手に四散して、今じゃ綺麗とは到底いえない星空を見せてる。

緊張の糸が切れたせいでその場にへたり込んだ。命の危機ってこんな身近だったかなあ。

「済まん済まん。なんせ敏感でいかんの。お嬢さんが魔界の人だから余計かの」

よほど慌てたのか、じいさん既に腰を伸ばして駆け寄ってきた。

やっぱ、嘘つきじいじじゃん。って怒る気力もないけどね。

「…あなたの正体が…わかったよ」

じいさんに手を貸してもらって立ち上がって、やっとこさ口にした。まあ、予想はしてたんだけどね。確信ってかなり無理があったからさ。

「ほほう。わしは何者かな？」

「けっ。楽しんでやがる。」

普通じゃ信じられないけど、そうとしか結論付けられない。ってことはそれが正解。

「あんだ、ソロモン王だな」
あたしの答えに満足そうなじいさんの笑顔が正解と答えていた。

つづく

第五話

ソロモン王。

人間界において、否、全世界において四大元素を解明した、唯一無二の存在。いかな魔人であつても四大元素のひとつにまで迫れた者はいない。その力は絶大で、あらゆる自然と調和し、あらゆる外敵を跳ね除け、世界の理を超越するという。

なんてそれらしいことを魔学会の先生が言つてたっけなあ。

公園つてところで話すのは、あたし的に不利だということと、ソロモンじいさんの正体が露見したことで、じいさんが身を隠す必要もなくなつたんで、あたし達は慎一郎を呼び戻し、慎一郎の家に会谈の場を移すことにした。

その道すがら、慎一郎があたしの口走りそうになつた「しん……」つてのが聞こえたとか言つてきたけど、あえて無視。だって、不覚にも自分の危機的状況になつたからつていつて、その日に出会つたばかりの男の名前を口にしようとしたなんて、恥ずかしくて言えるかよ。

慎一郎の家つてのは、四角い建物の中の三階部分のことらしくかつた。狭いつて文句言つたら「これでも広いんです」だって。聞いてびっくり。この四角い建物の中には同居人がいて、総勢十人なんだそう。家を共同で住むつて、おかしくない？

なんて余談はどうでもいいんだ。とにかくソロモンじいさんと話さなくては。

「おじいさんは、何を飲まれます？ マミさんはコーヒー以外のものですよね？」

部屋の照明を付けて慎一郎は飲み物を用意するべく、奥の方へと消えて行つたが、声だけをこちらに寄こした。

「コーヒーって、あれだろ？ 飲んで苦かった、あれだよな？ そんなもの出してみる。生きてることを後悔させてやる。」

「わしは、ワインでもあればいいんじゃないか？」

「おお、じいさん。ワインとは、いける口だね。え？ ワインがわかるのかって？ そういやあ、人間界では知らない物ばかりだったけど、ワインはわかるよ。果実から作った、飲むと気持ちが悪くなる飲み物だ。起源は随分と古いもので、世紀をまたいで世界で広く楽しまれてる。って、どうでもいいけど。全ての世界にあるよん。」

「あたしもワインでいいや」

鬼神界で飲んだワインは、黄色い果実から絞ったもので、すごく甘くて旨かった。この人間界ではどうだろうね。

「ママさんは未成年ですから駄目ですよ。飲むならぶどうジュースにしてください」

未成年って何だ？ まあ、苦い飲み物でなけりゃ、何でもいいけどね。

それよりも、話はそんなことじゃないんだよ。あたしとしては、このソロモンじいさんに聞きゃ無きゃならないことがある。もちろん、この世界からの出口ですがな。

「なあ、ソロモン王」

まあ、一応、敬意は表さないとな。

「あたしの世界を知ってるってことは、入り口も知ってるってことだよな？」

「なんじゃ、そんなことかの。そりゃ、知らんことはないが、教える気はないの」

え？ 今、教える気が無いって言ったか？

「おいおい、あたしは、あんたからすれば厄介な異世界人だろ？」

それが、素直に自分の世界に帰ろうってんだよ。何か問題でもありませんか？」

ふふん、と鼻を鳴らすソロモンじいさん。ってか、じいさんってば若返ってないか？ やっぱり先刻は大分芝居が入ってたのか。今

じゃ背筋もピンとして、背丈も慎一郎よりは低いが、発する威厳っていうか、オーラみたいなものは半端ないくらいに強い。

「よいか、夜の女帝にして美の女神オランダの娘よ」

「ありやりや。母さんもご存知で？ これは参りましたね。下手するとこのじいさんと母さんがグルって縮図も描けるか。」

「これからわしの頼みをきいてくれるのなら、考えんでもないがのにやりと笑う表情のいやらしいこと。わかつてるんだろ？ あたしに選択権なんてないってこと。つまりは「帰りたいんなら、言うことをきけ」ってことだろが。」

「まったく汚い取引だよ。ってか、取引にすらなっていないか。」

「仕方ないってのはこのことだよな。いいよ、受けてやるうじやない。でも、こっちの質問にも答えてもらうのが条件だけだな」

そう言った時のソロモンじいさんの顔は、少しくらい真面目な表情になるかと思っただが、にこやかな顔をより一層笑顔にしてうんうんと頷くだけだった。

何か見透かされているようで気持ちは良くないね。まして答えるなんていっても、本当のことを話すとは限らないってのも確かだしね。

その時になつて慎一郎が飲み物を持って現れた。あたしにはデカイコップに宣言通りぶどうジュースを持ってきやがった。もう片手には瓶をぶら下げていたが、それって何だ？ 瓶の色すら定かでないほどホコリにまみれて、中身すら見えやしない。大丈夫か、それ？ 「いやあ、ワインなんて飲むことないんで、確か数年前に貰ったのが棚の奥にあったと思っただんですけど、どうやら年代物になっていたらしいです。旨いですよ、きつと」

「きつとって、お前……。まあ、あたしが飲むんじゃないからいいけどね。」

「いそいそと瓶の蓋を開けるのはいいけど、なんか泡が出てないか？ ワインだよな？」

「な、なんかカビ臭いですかね？」

なんかじゃなくて、完全にカビ臭いつての。悲しい奴だな。

「いえいえ、これくらいが飲み頃ですよ」

「ソロモンじいさんってば飲む気満々ですか？　ありえんてしよ。」

「昔のワインは、全てこんなもの。瓶の中で自然発酵させるもんじゃから、熟成がマチマチでの。それでも、うまいワインばかりじゃった」

細かい気泡が浮くワインをめながら、ソロモンじいさん一口付けた。

「んん〜。酸っぱいが、いい味じゃ」

ほんとかよ？

まあ、いいや。そんな話じゃないんだから。本題に入らなきゃ。

「けど、全能なるソロモン王が、何であたしなんか頼み事なんだ？　自分でやった方が早いと思うけど」

あたしが急に話を戻したもんだから、じいさん、持っていたグラスを揺らすのを止めて、静かにテーブルに置いた。慎一郎が「ソロモンおう？」なんて声を上げたが、あえて無視。

「先刻も言ったが、相手が姑息でな。わしの気配で判るらしく姿を現さん。それだけでなく、相手はあの蟲を使って力を貯める奴での。若者の体内から生き血とある種の生体エネルギーを奪って飼い主のもとに戻る。その力を今溜め込んでいるんじゃないやと思う。するとじゃ、力を十分に蓄えたそいつは、わしの力も及ばないものになるやもしれん」

「そいつって、おじいさん。犯人がわかってるんですか？」

慎一郎が合いの手を入れたが、あえて無視。

「ソロモン王といえば、神聖魔界実力者ベリアルを操るほどの偉人だつて習ったぞ。今の話では、到底そんな凄い実力があつたとは思えないんだけど」

「え？　ベリアルつてダンテの戯曲に出てくる奴ですか？」

「またも慎一郎が合いの手を入れた。が、ソロモンじいさん、一瞥

くれただけで無視。

「この世界はの。魔法というものを捨てた世界なんじゃ。わしの思い違いだと言つていい。人間は魔法を捨てれば自然と共存し、その力も借りて繁栄するはずじゃった。だが、魔法を忘れられん一部の錬金術師達は、科学という道を見出した。しかし、科学は自然と共存することが不可能なものでな。あらゆる生命を犠牲にして、人間のみが繁栄するという歪曲した手段であるにも関わらず、気付いた時には全てを失った後じゃった」

「魔法ですか？ お伽噺ですね」

「いちいちうるさい合いの手だな。でも、あえて無視。」

「全てつて、ソロモン王。あなたは使えてるじゃん。矛盾があるぞ」
「わしには既に力はないのじゃよ。太古の昔、わしは四大元素の全てを理解した。それは使うとか得るとかいうものではなかった。表現はしづらいが、力というものでも無くても。波動というか、ある種のエネルギーじゃな。それを貸してもらうだけじゃ。今では、自然界そのものが希薄であるために、そのエネルギーすら微弱での。わしを守ってくれるだけで精一杯なんじゃ」

「四大元素？ あの密教とかの地水火風ですか？ 道教あたりでは木も入つて五行なんて言うんですよね」

「段々うつとしくなってきたか？ でも、まだあえて無視。」

「じゃ、ソロモン王には、何の力も無いと？」

「そうじゃ。わしには元から力など有りはしない」

ソロモン王は、力なくうなだれて見せた。しっかしなあ。信じられるわけがないし、芝居は得意そうだからねえ。

大体、齡何千歳だ？ ベリアルが没して既に二千年以上。それに近い歳か、それ以上だよな。確か人間界の住人で、短命だったんじゃないか？ そう習ったような。もしかするとベリアルに寿命を延ばしてもらったかも知れないが、千年は無理だ。あたしらのような種族でも数百年生きる者はいる。しかし、千年単位では無理だ。肉体の方が維持できない。

なのにソロモン王は…。

「騙すには無理があるなあ。ソロモン王が今年でいくつになるかは知らないが、二千歳はとうに越えたはずだ。それを力も無い人間が生きられる年月とは思えないがね」

「二千年？ 二千つて二世紀つて…」

慎一郎が言葉の途中で消えた。と同時に遙か向こうで破壊音。つて、あたしが蹴ったんだけど。いい加減、うつとしいを通り越したんだよね。

「うーん、お嬢さんが納得してくれんのは残念じゃが、本当のことよの。四大元素のもたらす力なのか、わしは常にこの世界から守られておる。その昔、ベリアルと世界を席捲したこともあったが、その時はこの世界の自然も豊かで四大元素もすばらしい力を見せてくれた。本来であれば、この世界の秩序を壊したわしに生きる権利などない」

「だけど、四大元素はそんなじいさんを生かしていると」

あたしはソロモンじいさんの後を引き取った。なんか泣き落としに合ってるみたいで、気持ち良くない。

「つまりは、なんの因果か四大元素は、この世界を壊す切っ掛けを作ったじいさんを、恨みに思ってたか死なせないようにしていると」

「そんなところかもしれんの」

はあくって大きな溜め息は、あたしだったか、じいさんだったか。このじいさん、この人間界そのものに恨まれてるってことか？

でも、それって意外な恨まれ方だよな。普通は殺してやりたいほど憎いつてなもんだろ。なのに憎いから死ねないようにしてやるって、ある種異様な形の報復だろ。死ねないってのは苦しいかどうかはわからないけど、永く生きるってのは苦しいかもな。終わらない人生。終わらない明日。ちよつと寒いかも。

「まあ、いいよ。べつにじいさんの人生に興味があるわけじゃないから。でき、この世界からの出口なんだけど」

「それは教えられんの」

あつ、やっぱり落ち込んだのも芝居か。即答はないだろうよ。

「まだ、わしの頼みを聞いておらんじやるの」

じやるのつて。あのね、あたしに何をさせたいの？

じろつて感じで睨んでやったけど、齡二千歳にや赤子の泣き声程度だろうな。

「蟲の飼い主を退治して欲しいんじや」

やっぱりな。話の流れで、今のじいさんには力が無いってことは事実だろう。つまり襲われて身を守ることはできても、自分から攻撃することは出来ないってわけだ。結果、自分とは別の力を必要としたわけだ。

ン？ 待てよ。これって四大元素にとっては良いことなんじやないか？ だって、自然を壊してる人間そのものを駆逐してくれてるわけだよな。人間が排除されれば自然界も元に戻る可能性が高い。なら、そいつをやつつけるのつて四大元素の恨みを買わないか？

「考えることは分かるの。この世界だけでなく、他世界もそうじやが、四大元素は誰の味方でもあるんじや。秩序を乱さぬ限り見捨てることはない。限らない慈愛の存在なのじや。じゃから、この世界で秩序を乱す者を排除したいが力が足りん。それでお嬢さんに白羽の矢が立つたわけじや」

じゃ〜つてね、大袈裟に両手広げなくてもいいつての。

四大元素は世界の調和を好み、乱すものは排除したいつてか。すると殺す行為は排除じゃないか？ あたしらが食べるために殺すのも、景観のため木を切るのも許せないはずじやないか。

「弱肉強食は世界の法則じや。だが、力のための傍若無人は許されんというわけじや」

あたしの疑問をぶつけると、じいさんはあつさりとか代弁した。

あ、いつの間にかじいさんになってるけど、いいよな。

「で？ あたしに倒してほしい奴の正体つてのは？」

こうなったら仕方ないよな。聞くだけは聞いてやる。やるかどうかはわかんないけどね。

「それがの。言い辛いんじゃないの？」

「なんだよ。もったいぶってんじゃないっての。人間界にいるのって、大半は知らないけど大した奴いないでしょ。だって魔力使えないんだから、大したことないって。」

「お嬢さん。墮龍^{だりゆう}って聞いたことあるかの？」

「だりゆうだって。へんてこな名前だねえ。まるで龍の血族みたい。笑っちゃうっての。伝説の龍の血族って……。」

「だりゆうだ〜!？」

「あたしの叫びは、きつと凄い音量だったんだろうな。だって慎一郎が目を覚ました。」

つづく

第六話

「墮龍^{だりゅう}って、あの墮龍か？

まさかねえ。だって、ここ人間界だよ。間違ったって龍の血族なんかいるわけないじゃん。

いやだねえ、じいさん。悪い冗談だよ。

「あゝ、冗談だと思っておるなら、悪いがそうではないの。確かに龍の血族じゃが、お嬢さんの方が詳しくそうじゃの」

優しい笑顔で「良い子」みたいなニュアンスで言うなつての。

墮龍だぞ。軽い話じゃないじゃん。

「ママさん。だりゅうって何ですか？」

起き上がってきた慎一郎がお腹を押さえて戻ってきた。まったく、もう少し寝てるつての。うっとしいな。

「じいさん。悪いが相手が最悪だつて。墮龍じゃあたしに勝ち目ないよ。魔力使えたとしても足元にも及ばないだろうね」

墮龍。

その名の通り天から墮ちた龍といわれてると、龍の血族から墮ちたとも言われてる。魔学会で学んだことを並べるなら、最悪、凶暴、最強に狡猾つてところかな。

龍の血族の一番下に位置する龍だけど、完全に成長すると本家の龍も凌駕する能力を持つともいわれてる。龍の血族は確認されているだけで五種。神龍を頂点にして墮龍までいるが、その全ては現在では確認されていないんだな。

記録はある。今から百年ほど前、神聖魔界でも翼龍が確認されているし、鬼神界では五十年前に炎龍が目撃されてる。確かに存在はしているんだけど、生態は謎だらけ。他の生物と交わらない。つてか、接触を極力嫌うみたいな性格らしく、近くで確認することすら至難の技。姿を確認できたことすら奇跡つて言われてるくらい。

その中で例外なのが墮龍なんだな。

古代の記録から現在まで、墮龍の記録は計二回。鬼神界と天上真界で現れた。墮龍はどちらかといえば積極的に他生物に近づく。つて言うより食料にする為に近づく。どうゆう形で生まれるのか確認されていないのに、成長過程は確認されている。比較的樹齡の進んだ木に寄生して、その中で成長するのだけど、その栄養素つてのが問題。生きている生物の体液や魔力や生体エネルギーなんだな。それを自分の身体のウロコから分離、変化した蟲を使い集めるのだ。厄介なのは、墮龍の好むのが人型のそれだということと、墮龍の蟲は人型に入り込むまでは透明に近く、発見しづらいということ。

鬼神界では住民三十人が犠牲となり、墮龍は完全体にまで成長し、二百人以上を虐殺した後、鬼神界の軍勢五百人に退治された。

天上真界では、鬼神界での騒動の後だっただけに、対応も早く犠牲者は五人の段階で、寄生した木を発見し、完全体になる前に退治できた。

退治は出来るだろうよ。そうだなあ、天上真界の高官クラスなら二人もいれば高等魔術のひとつくらい出来るから、大した苦労はないな。鬼神界の精鋭十人でも可能じゃないかな？ 縦横無人な攻めに、誰も追いつけない敏捷性があれば、そう難しいことじゃないだろうな。神聖魔界なら…あたしの親で十分かな？

でも、はつきり言えることは、あたしじゃ絶対に無理！

「なあ、じいさん。じいさんだつて知ってるはずだろ。伝説のソロモン王なんだ。墮龍がどんだけつてのは、知らないはずないだろ。あたしじゃ無理だよ。墮龍の前に生け贄を一匹増やすのと同じだよ。頼むこと自体が間違つてるよ」

なんとか納得してもらつて、この危険から回避しないと、人間界に来た途端に死んじゃうじゃん。大体、無理難題だつての。

「わしが全盛期なら、わしが始末も付けよう。じゃが、今のわしの力は知れておる。素手なら、この若者にも勝てん」

しつこくじいさんは食い下がる。

「おじいさん。僕は『慎一郎』って名前です。しんいちろうですよ。

おじいさんと勝負するつもりは無いですけど、対等に戦うことくらいできますよ」

何で対等かな？　ってか、ソロモン王と喧嘩して単なる人間のお前に勝ち目なんか無いつうの。

あああ、突っ込み入れてる場合かっつての。うつつうしいな。

「まず、あたしはこの世界じゃ魔力使えないだろ」

「え？　マミさん、魔女ですか？」

何でお前から合いの手が入る？

横目で睨みつけてやったら、口に手を当てて慎一郎は黙った。

そうそう。良い子だ。

「それについては、解決策がある」

にっこりと微笑むじいさん。いい加減、気持ち悪いぞ。

じいさんは、ローブの中に隠していた右手を突き出すと、人差し指に付けていた赤茶けた指輪を外して、あたしに差し出した。

「ソロモンの指輪じゃ。この指輪をしていれば、この世界からの誓約に縛られることなく、あらゆる力が使えるようになる。受け取りなさい」

って言うけど、それを受け取るってことは、有無もなくじいさんの頼みを聞かなきゃならんってことだろ？　どうなのよ、これって。

「銅の指輪ですか？　珍しいですね。でも、銅にしては堅いですね。何か混ぜられているんでしょうかね」

あたしが受け取りを躊躇してる間に慎一郎がじいさんの手から指輪を取っていた。

おいおい、只の指輪じゃないぞ。ソロモンの指輪だつての。って説明する気にもならんけど。

「マミさんだと中指ですね。人差し指じゃ、少し緩いみたいです」

あ、そう。あたしは一般人より指細いからな。母親譲りなんだよ。母さんも指が細くてね。あたしより細いんだから。人差し指なんて小指かと思うぜ。冷やかしに「蜘蛛の足」みたいって言ったら、二日ほど家の屋根で過ごすことになったっけ。はは。

あたしは、左手中指に光る赤銅色の指輪を眺めて、そう思った。

……。
……。

何であたしの指に指輪がある？

ええええ！ 慎一郎！ てめえ、なんてことしやがった！

一生懸命に外そうと試みた。試みたが、一切は徒労だった。

「ははは、無理じゃよ。指輪は、既に新しい主人と認めたとようじゃよろしくの」

「お似合いですよ。外すことないじゃありませんか。女性の指に指輪をはめるなんて初めてだったんですけど、いやあ、照れますね」

「てめえは、一体自分が何したかわかってねえようだな」

「は？ げふあっ」

変な言葉を残して慎一郎は、今一度あたし達の前から消えた。今度は、派手な破壊音と共に部屋の扉がふつとんで、慎一郎らしき影がその奥に消えて行った。その向こうでガタンガタンと何かが転がる音。

まったく、こんなんでは気は晴れないが、あんまり無茶なこととしても死んじまうからな。手加減くらいしてやるけど……。なんてこつたい。

じいさんがにんまりと笑ってやがる。

地図は慎一郎が見てる。

あたしが見たって、人間界の地名なんて知らないんだから、当然といえば当然。

くそいまましいことに、指輪を受け取っちゃったことになった。何度「無理だ」を連呼しても取り合ってもらえず、拳句に墮龍の潜んでいる場所の説明が始まっちゃまって、あたしはサジを投げた。

ばっくれて逃げるって選択も出来なくはないよ。でもよ、それって結局、何の解決にもなっていないんじゃないかってことに気付いたわけ。

だって、指輪をもらって魔力を使っても、他世界に繋がる入り口が見つけられないんじゃ、あたしはこの人間界で生きていかなやならんでしょ。んでもって、そこに墮龍なんて物騒な奴が潜んでるんですよ。ここで逃げてしまっても、墮龍を退治出来ないとなれば、いずれ合間見えるわけよね。それも、完全体な奴と。それなら、まだ完全体になつてない今の方が楽じゃない？ でしょ？

結論は本意じゃないけど、気の毒なじいさんの頼みだし、今の状況で人間界の食い物も嫌いじゃない。完全体になるには、墮龍もまだ倍の生け贄が必要だろう。

あたしが期待できる要素は、そこしかないが、今のタイミングを逃すことは出来ない。

「マミさん。もうすぐですよ」
隣に座つて、じつと地図とにらめっこしていた慎一郎が、あたしの肩を叩いた。

いかんいかん。眼を閉じて考えていたつもりが、いつの間にか居眠りしてたらしい。ってか、これって乗り物だったんだな。でかい芋虫が人間食つてると思ってたんだけど、違った。

でも、こいつのカタンゴトンってリズムは気持ちいいんだよな。何か、眠気を誘うんだよ。

「次ですね」
慎一郎が、傍らの鞆を膝の上に引き寄せて、あたしの方を覗き見た。

なんだよ。心配そうな顔してんじゃないよ。気弱は運まで逃がすんだぜ。何事も強気。それが運もチャンスも逃がさない秘訣さ。って、今のあたしには、一番似合わんね。

芋虫を降りて、建物を潜って歩き出したあたしの眼には、先刻までいた世界とは同一世界とは思えなかった。

だって、これって自然ってやつでしょ。確かに人家は点在してるよ。でも、それを隔てるのは木々に地面に川に……って、当たり前前つちや当たり前前だけどね。

この世界に来て、初めての深呼吸。うえっ。まだ、完全な空気じゃないな。何か人工的な臭いがプンプンする。

「この辺りは、人工的に植林されてましてね。自然な森は皆無に等しいんです。人間の都合で、成長の早いものや、木材に使えるものがほとんどなんです。それすら今は使われず放置されて不自然な森に進化してるんです」

あたしの不満面を見て取ったのか、慎一郎が説明してくれた。

なるほどね。人間が手を加えたんじゃ、木々が文句を言うつてものだ。自然が正常に機能してないのも頷ける。不満だらけな木々達が、それでも必死に正常化しようと努力してる様が見えるようだよ。けな気つていうのは、こういうのだろうね。

「ここから、少し歩きます。夜明け前には着くと思いますが、大丈夫ですか？ なんなら、どこかで休んで、夜明けを待った方が良いのでは？」

「はん。確かに昼間の方が、視界が開ける分にや好都合かもな。でも、今晚のうちに後十人も取り込まれたら、それだけで力が倍加されちまう。そうになったら、いくら視界があっても力の差でこっちが不利になるんだよ。今でなくちゃ、意味が無い」

「ですが、相手の出方もわかりませんし、今の段階では警察に応援していただくことも出来ません。危険な奴なら、それなりの準備も必要でしょうし、なにより爆弾ですからね。ヤケになって爆発でもされたら、こっちの身もあぶないでしょう」

「うるさいな。別にお前に戦えなんて言っていないだろ。お前は、案内役でいいの。いいか、あたしが墮龍を見つけたら、出来るだけ離れているんだぞ。完全体じゃないにしても、半端な奴じゃないからな」

余計な心配事を並べる前に、自分の立場をわきまえろ。お前は、下僕だ。

「いえいえ、ママさんが危険ならば、助けないわけにはいきません。ママさんは、僕の後ろで隠れていてください」

……。それでいいなら、苦労はしないけどね。あたしの蹴りで吹っ飛んでしまう奴に何が出来るっていうのかねえ。

あーだこーだと話しかけて来る慎一郎を無視しまくって、まだ暗い夜空を見上げた。

おおお、ここじゃ星が見えるじゃない。オリオン座が見える。つてか、それだけしかわかんないんだけどね。秋から冬限定。

横から慎一郎が指差しながら、白鳥座やら大熊座やらカシオペアとか言うが、あたしには良くわからん。どれとどれを結ぶっていても、オリオン座以外はわからんっちゅうの。

あ、忘れてた。大事なことだ。

ソロモンの指輪を貰ったのはいいが、本当に魔力が使えるかは、試してない。これをしておかないと、大事な本番で、魔力を使った途端にピカゴロドカンじゃ洒落にならん。

歩く足を止めず、あたしは軽く眼を閉じる。右手を軽く握って中に空間を作る。後は簡単。

手のひらを熱い物が走ると同時に手を開く。途端にポツと手のひらサイズの炎が現れる。五歳の子供でも出来る簡単魔術。

あたしは空を見た。大丈夫。満天の星ですわ。ソロモンじいさんは、嘘をついてない。

あれ？ 慎一郎がいない？ って後ろか。

「なにしてんだ？ 道案内が後ろにいたんじゃ、役立たずだろ」

「マ、マミさん。て、て、手が燃えています！」

あゝ、そういうこと。人間って魔力捨てたんだっけ。そりゃ、直に炎を手で持ちゃ、大変だわな。けどな、これはあたしの手を離れるまでは、炎の形をしてるだけなのさ。だからこうして

「あっちゃー！ あちゃ、あちゃ！」

な、お前の足に投げた途端に熱を吐く。

「こ、殺す気ですか！」

「そんなんじゃ死なないよ。精々が火傷くらいだろ。さてと、遊んでる間に、大分近づいたみたいだな。肌にビリビリくる」

「え？ ああ、そうですね。おじいさんの地図では、この山の頂上付近でしょうか」

山ね。なんだか小高い丘って感じだけど、木々がうつそうとしてるから、でかい山に見えないこともないか。

ただ、ここは廻りとは違う山だ。木々が整然と並んでないし、ツタのある草や大きな葉を広げる身の丈ほどの植物も多い。何より、木々の年齢が若くない。どれも皆、百年は軽く越えるものたちばかりだろう。

ここは、自然の森だ。人間が介入してない。

なるほど、ここなら墮龍が好む木がありそうだ。異質な感覚が、あたしの産毛をチリチリ焼くような感じがする。

急ぐわけでもなく、一步一步を踏みしめるように近づく。ついでにうか登る。

不意に視界が開けた。下生えの草が枯れている。大木とまではいかない木々が、見るも無残に横倒しになっている。へし折られたのではなく、枯れ果てて自分を支えられなくなったのだ。地面を盛り返し木の根がむき出しになっている。

その中央。一際大きい木が立っている。あたしの身の丈ほどで大きく二股に振る分けられた幹が大きな笠を広げたように枝と葉を茂らせている。しかし、その葉は今にも落ちそうなほどに茶色く変色しているのは、この木も寿命が短いことを物語っている。

幹の二股付近。そこが異様に盛り上がっているのは、あたしの気のせいではないよな。

「慎一郎。下がってる。ご対面の時間らしいや」
間違いない。あの瘤に、墮龍はいる。

つづく

第七話

あたしの肌がしびれるように総毛立つ。

こんなことって、今までの経験でも、そう何度も無い。

堕龍が潜んでいるであろう木までは、まだ結構な距離がある。円形に枯れ果てた中央に位置する木に、あたしの足で全力疾走したとしても、僅かな時間とは言えないだろう。

なのに、その存在が感じられる。

ちよつと待つてくれない？ これって、たかだか数人の人間が犠牲になった位の話かよ。ここまで膨大な存在感を示すってことは、かなりの成長をしてるってことだろ。ってことは、慎一郎やソロモンじじいが把握してない犠牲者つてのがいるってことだろが。

あああ、やっぱバツクレるべきだったかな。

いや、ネガティブに考えるのも、どうよ。堕龍は、龍の血族の中でも最下位だけど、腐っても龍の血族。完全体に遠い成長過程でもそれ相応の力ってことだろ。だとすると、今のこの異様な存在感つても納得できないか？

あつ？ でも、強さがでかくなるかどうかってことで、現状には大差ないってこと？

いや、不完全体なら力も制限されるだろうから、たいして動けないってこともありってことでしょ。一気に攻めれば、反撃されないうちに決着ってこともありでしょ。

って、うだうだ考えてんのも、あたしには似合わないっての。

最初の一手で、決める！

両手を握り締めて胸の前で組み、身体を縮めるようにして眼を閉じる。身体の中から熱くなるように力が集まる。恐らく、今のあたしを見れば、薄く赤い光が身体を包んでいるのが見えると思う。

魔力を貯めることで、大きな魔術を使える。手段や手順は違っても、大半の魔力は、あたしと同じように使っしかない。

どういふ魔術で、一気に勝負をつけようか迷うとこだけど、比較的龍の血族は火に強い。ってことは、冷気ってことになるのかな。

「ちよつとマミさん。ホタルみたいに光ってるとこ申し訳ないんですけど、あの木の根あたりに白く見えるのって、骨でしようかね？」
最大限に魔力を貯めて…って、慎一郎、何か言った？ 集中してる時に話し掛けないでほしいんだけど。

「あれって、服の残骸ですかね？ ってことは、人骨ですか。あつちのは、何か動物みたいですね。あ、頭が長いですね。鹿でしようかね？ あそこら辺は、犬か猫でしようか」

あああ、うつとしいっての。集中できんだろが。
骨がどうしたって？

集中を一時中断して、薄目を開けて確認。 あん？ 確かに白い骨らしきものが、枯れた草の間に見て取れる。

あたしの足元、同じような枯れた草なんだけど、結構な茂り方してたんだろ。 膝丈は無いが、それに近いくらいに折り重なってる。

待て待て。 あそこで骨が見えるってことはだよ。 あそこだけ異様に地面が盛り上がっていて、尚且つ、草丈もそれほど無いところだった。 ってなことは、あたしの都合のいい考えだよな。 ってことは、あそこに見えてる骨って、どんだけの量あるってのよ。

マズイってか、ヤバイってか、どうにも危険な予感。 完全な読み違いだ。

墮龍の奴。 木の中で眠る前に、この辺りの動物やら人間やらを、片っ端から喰らいやがったんだ。 ある程度を直に喰らうことで力を蓄え、木の中で眠る期間を短くすることにしたんだ。

ちくしょう。 前例が無い。

廻りの空気が、熱気のような熱を帯びる。 やっぱりか。

あたしは、慎一郎を突き飛ばすと、そのまま頭を掴んで地面に押し付けた。 あたし自身も枯れた草の中に埋もれる。

“懐かしき魔力の香りかな”

地の底から響いたのかと思えるような不気味な声。いや、声じゃないな。直接、頭の中に響いたようだった。

同時にバキバキと生木の裂ける音が響いたかと思うと、ドンという爆発音と共に廻りが明るく照らされた。

恐る恐る顔を上げてみれば、墮龍が潜んでいたであろう大木が、紅蓮の炎を吐いて炎上していた。

不安定に揺れる炎の明かりの中、その影はあたしの身長の一・二倍ほどの高さでたたずんでいた。

全身が深い緑色に見えるが、良く見れば、その中に赤黒い筋が無数にある。その表面が歪に光っているように見えるのは、ウロコのせいかもしれない。あたしの頭くらいの高さに二本の突き出たものは腕だろうか。三本の指に鋭い鉤爪が炎を反射して輝いている。

墮龍。龍の血族。

ここまでできては、見逃してくれるような甘い考えはないだろう。

逃げるって手段もあるが、慎一郎が付いて来られるとは考え難い。

あたしは、静かに立ち上がって、墮龍を見据えた。

異様に突き出た頭部は、長い鼻面で、びっしりと細かいウロコが立っている。耳が見えないが、あるとしたらそこまで裂けているであろう口からは、時折、鋭い牙が幾つも見え隠れしてる。それに眼だ。肉食獣特有の前面だけを見つめるための両目は、血の色より紅い光を放って、あたしを見つめている。頭部に見える何十本もの角も不気味だけど、両目の気色悪さからしたら可愛いもんね。

あたしの肌が、墮龍が発する熱気と炎の熱で、じつとりと汗をかいているにもかかわらず、鳥肌が立っているのは、完全に恐怖心なんでしょうなあ。こあいよう。

んなこと言っても、対峙しちまってんのに四の五の言ってる場合じゃない。やってみるしかないのよね。

「慎一郎。できるだけ離れてな。ちよつとばかりの派手さじゃ済まないみたいだから」

墮龍から眼を逸らさずに、きつとまだ寝てるであろう慎一郎に声

を掛けた。完全体以前なら、一撃必殺なんてこともあったけど、完全体が相手では勝ち目は相当薄い。ド派手な真似して、奴の隙を窺って逃げるが得策なんだろうけど、果たしてそんな隙を見せてくれるかどうか……。

“不可思議なるは、人間界に魔力を持つ者。人間は、魔力を捨てた愚か者であつたはず”

まただ。今度は確信した。墮龍の奴。直接、頭に話しかけてきやがる。

“まあ、よい。我の力になるのであれば、何者であろうとよい”

やっぱ、あたしも餌扱いだよ。

けつ、こつちは既に追い詰められたも同然。先手必勝って言葉もあるんだ。

あたしの後ろの方で、ガサゴソと動く気配。どうやら慎一郎が離れてくれたらしい。

幸い、先程貯めた魔力は、あたしの中にまだある。小出しなんて可愛いことしてらんないからな。でかいの一発、ぶちかますぜえ！ぐつと身体を沈めて、両手を胸の前で上下に合わせ、その中に貯めた魔力の全てを注ぐ。真っ白な光が溢れると同時に、手の中から盛り上がる光の珠に変化する。

そいつを押し出すように、墮龍に放つ。一瞬の躊躇もなく、真っ直ぐに墮龍に向かって飛ぶ珠は、寸分変わらず墮龍を捉えた。

たくつ、可愛くないったら。墮龍の奴、避けるような素振りもしやがらない。つくづく小物扱いか？

一気に白い光が渦を巻くように広がると、墮龍を巻き込んで四方に広がる。途端に急激な冷気が後を追う。枯れた下草に燃え移っていた炎が吹き消され、パキパキと音をたてて氷付いていく。今や燃え盛る大木も例外なく、炎を掻き消され、氷の彫刻に変えてしまう。

急激な温度変化に、大気も付いていけないのか、激しい水蒸気が上がり、一帯はモンモンとした白の世界に陥った。大木の炎も消えたために、夜の暗さが戻ってきたが、やっと出て来た月の明かりで

十分に明るい。

軽いそよ風くらいで、水蒸気の煙は四散していった。

視界が開ける。

あたしの足元手前までが、真っ白な氷の世界に変わっていた。

墮龍は、きつと相変わらずで、その場にたたずんでいるだろうと予想していたが、驚いたことに、奴も真っ白けでやんの。うっそ〜ん。

でも、チャンスには違いない。

ここで、止めを刺せなきゃ、あたしが終わる。

あたしの貯めた魔力のほとんどを注ぎ込んだ冷気は、絶対零度には及ばないけれど、あらゆるものを芯まで凍てつかせることは出来たはず。

となれば、凍りついた墮龍を倒すのに最適な方法は。

両手を広げるように魔力を貯める。大きく深呼吸するようにすると、自然と顔が空を向く。限界まで貯めるには、時間が惜しい。

体内に溜め込んだ魔力を、両手を受け皿のようにして、吸い込んだ息と共に吐き出す。赤い光が手の平で丸くなると同時に火球と化した。

それを頭上に持ち上げ、墮龍目掛けて投げつけた。

火球は、あたしの手を離れた途端に、数倍に膨れ上がり、墮龍にぶつかった瞬間、膨大な熱量を発して辺りを炎上させる。凍った木や草が、解凍されずに蒸発して灰になった。

急速に凍らせたものを強力な熱量をもって熱すれば、どうなるかな？

難しいことはわからんけど、確か内部崩壊するんじゃないかな？

あれ？ 違うか。いいや、確か壊れるんだよ。どんな堅いものでもな。我ながら、いい加減だな。

真っ赤な炎が、辺りを昼間のように照らし出す中、次の手を考えるべく、あたしは再度、魔力を貯めるために両手を握り締めた。

“自ら凍らせておいて、わざわざ溶かしてくれるとは”

熱い空気の中、冷たい声が頭に響く。くっそ、やっぱ、無理か。紅蓮の炎が、何の切っ掛けなのか、急速に鎮火していく。いや、鎮火じゃない。ある一点を中心に吸い込まれているようだ。

あつという暇も無く、炎は消えて無くなった。

たつくよ。根性悪いよな。

現れた時と同じように突っ立ってやがる。

“魔力の質は悪くないように思えたのだが、所詮は人間界”

けっ。人間じゃねえっての。

なんて言ってる場合じゃないな。

多少の魔力は、先程貯めたんだけど、これで大きな攻撃はできんな。向こうもこっちの力量を測ったくさいし…。

墮龍が身体をくねらせて前進してきた。

下草が消えて墮龍の全身が確認できるようになった。こいつ、足が無い。

そういえば、墮龍が鬼神界に出現した記述にも、墮龍の足については書かれていなかったはず。もしかすると、こいつ、足が遅いか？にやっとする間もなかった。

墮龍が大きな口を開けた。

“預かり物を返そう”

頭に響いたかと思っただ瞬間に、墮龍は紅蓮の炎を吐いた。

げげっ、これって、さっき吸い込んだあたしの炎だったの？ やっぱいいじゃん。

あたしの炎は、自慢じゃないが圧縮すれば石だって溶ける。あいつ、こんなの吸い込んで、無事だったってのかよ！

第八話

クソ馬鹿野郎ってばやいても、一瞬なんだよな。

墮龍の放った炎は、あたしがぼやいている間にも迫ってくる。

あつという間の出来事だけど、焦るほどには緊迫感はないんだな。

右手を大きく下から上に振る。墮龍の放った炎は、あたしの手前で丸く四方へ滑っていく。まるであたしを丸い球体が包んでいるように、炎は避けて通過した。

これくらいは朝飯前ってなもんでしょ。先刻、急いで貯めた魔力が、見えない壁になって身を守ってくれる。って、これからどうすんのよ。

とりあえず、足に魔力を通して後ろに飛んで距離をとった。魔力を使えば身体能力も強力にできるって言ったよな？

枯れてない下草の縁に着地。狙ってたわけじゃないけど、なかなかの場所じゃない。これなら、身を隠すことも、そう難しくないでしょ。

“ほう、あれを受け流すのか。では、これは、どうだ”

え？ ちよつと、もう攻撃すか？ 少しは落ち着こうよ。って、あたしが言えた義理じゃないか。こっちも速攻だったしね。

無駄かもしれないけど、横っ飛びで膝丈の草むらに飛び込んだ。

身を隠し、再度、魔力を貯めないと、このままじゃ底をつく。

“隠れたつもりか？”

あはん、やつぱ、無理？

墮龍は、一度大きく身を震わせた。パラパラとウロコが落ちたように見えたが、地面に落ちる前に見えなくなった。

あたしの中で警鐘が鳴り響く。ヤバイ、蟲だ。

考えるより身体が素直に反応した。あたしの背丈の倍以上にジャンプして、二度ひねる。手足には魔力が込められてる。小さな悲鳴

が、いくつも上がっては消えた。風に轟だったウロコがキラキラと散る。

着地したところに、墮龍はもう一度、蟲を飛ばしていた。避けられない。

手足には、まだ魔力のなごりがあって、取り付かれてもその場で碎け落ちたが、無防備な身体まではカバーできない。取り付かれた瞬間に、焼け付くような痛みが走る。と。同時に襲う虚脱感。くっそ、こいつら魔力を吸ってやがる。

痛みと虚脱感に、不覚にも右膝が地面についた。次に痛みが引いてゆく。内臓にまで入られた証拠だな。ちくしょう。

幸いなことに、あたしの予想はひとつ当たったみたいだ。墮龍は、身体をくねらせて前進してくるが、その速度は驚くほど遅い。慎一郎が歩くのと大差ない。

ここを逃す手は無い。

両手両足を地面に付けて、完全に四つんばいになる。情けないが、この方が楽だ。

一気に意識を集中して、魔力を貯める。身体の中が熱くなる。身体の中で、小さな悲鳴が上がるのが感じられた。

けっ、半端な蟲ごとき、より以上の魔力に耐えられるわけないだろ。そのまま、急速に魔力を高める。全身がボウッと光りだしてきた。理屈はわからないけど、急速な魔力の溜め込みは、こうして身体が光りだす。

“ん？ 貴様、高等魔術師か。見くびっていたか。人間界も捨てたものではない”

うっせいつちゅうんじゃ！ あたしは、人間じゃないっての！ 虚脱感が抜けると同時に立ち上がる。ひく、あぶないあぶない。

こいつは、戦略の変更が必要だよ。出来れば、遠くから勝負したかったんだけど、無理と判明。ってことは、動きの遅いのを優位にせねばなるまいよ。

肉弾戦は、趣味じゃないんだけどね。いっくよん。

出来るだけ全身に魔力をまわしながら、手足に強く集中させる。握り締めた拳が、明るさを増す。膝から下も同様だ。

地を右足で蹴った。一瞬で距離が詰まる。墮龍の鉤爪が振り下ろされるのを左にかわして、顔面に右フックを叩き込む。

墮龍が吹っ飛んでいく。地面に三度バウンドして、焼け野原の上を滑っていった。

それについて行くように地を蹴って、滑り止まったところで、左足を軸にして半回転のキックをおみまいじゃ。

地面をスレスレに墮龍が飛んでいく。ここまできたら、攻める。

追いかけるようにジャンプする。もちろん、墮龍の止まるところは、見当つけてる。上から踏みつけてやっからな。魔力たっぷりのキックを思い知れ。

って思ったら、あんの野郎、立ち上がるの早い。上半身を、すっくと起こしたかと思ったら、眼の前に奴の尻尾が迫ってた。腹にもらって、ジャンプした元の位置まですっ飛ばされた。

魔力でガードされてるから、大したことはない。ちゃんと、両足で着地したもんね。

“ 凶に乗るなよ。小物め ”

やっぱ、致命傷じゃないよな。けど、肉弾戦なら、いい勝負に持ち込めるってことは、確かだと思うね。証拠は、奴のご機嫌が、余裕あるようには見えなくなっただってことで十分。

効果的なら、続けるしかない。ただ、あたしの体力がもつかどうか。

もう一度、魔力を貯めに入る。あたしの身体が、今一度、光りだした。

“ 愚かな。二度も同じか ”

ありや、バレてます？ でも、墮龍のスピードじゃ、あたしにはついて来れないのは実証済みだが。

地を蹴って、直進するように見せて、目の前で姿勢を低くし、左に回りこむ。後ろに回ったところで、右足を叩き込む。墮龍は、あ

たしの前をゴロゴロと、前転するように転がって……行かなかった。吹っ飛んだのは、あたしの方。何が起こったかは、あたしにもわからなかった。気が付けば、宙を飛んで、したたかに背中を木の幹に打ち付けた。

魔力ガードのお蔭で、怪我をするまではいかないが、息が止まるくらいは仕方ないか。

ゴホゴホと咳き込んで、立ち上がってみて、びっくり。なるほど。龍の血族は伊達じゃないってことか。

龍の血族には、ある伝説がある。確かめた者がいないから、はっきりとした記述は無いが、伝説としては残ってるんだ。

龍の血族は、四大元素の力を、それぞれ属性に従って行使できる。墮龍は、地に落ちた龍。ならば、属性は地であってもおかしくはない。

現に、あたしの目の前の奴は、自分の廻りに土の壁を張り巡らせ、それが生き物のように蠢いているじゃないか。

こいつは、ちょっとまずいことになった。

四大元素の力は、あたしの使う魔力とは、根本から違う。魔力は、大気の中や自然界の中にある特定の力を、自分の中に溜め込んで使う。使い方は、術者の適用に左右されるけど、基本的に使うものに制限はない。火に変えようが、氷にしようが、水や風にも出来るし、身体的能力を高めることにも使える。その気になれば、空だって飛べるけど、結構な集中力がないと、どこへ飛んでくかわからないから、みんなやらないだけ。

だけど、四大元素の力は、それ自体が力として存在している。いふなれば、固有の力なんだけど、それを使うことはできない。力の作用が解明できないからなんだ。

地の力は、地震だったり火山だったり。風の力は、嵐だったり真空だったり。火の力は、火そのものや太陽の熱だったり。水の力は、波や雨といった具合。それに介入して、その力を行使するなんてことは出来ない。それぞれが、それぞれに作用しあって、あらゆる現

象を起こすんだけど、それを使う方法が、有史以来、ソロモンじいさん以外説明されていないってこと。

それを無条件で使えるってのは、龍の血族の特性だと伝説になっ
てるってわけだけど、ここでその証明が成されたわけだ。伝説って
のも馬鹿にできないもんだよ。

厄介なのは、それだけじゃない。

あたし達の魔力は、結構な時間を貯めに使う。急速な貯めは、あ
たしみたいに光ったりして気付かれやすい。でも、四大元素の力は、
それ自体に力があるものだから、貯めも何もあつたもんじゃない。
つまりは、使いたい放題つてわけ。それって、反則だよな。

墮龍の廻りで動いていた土の壁は、左右に分かれると固まり始め
た。なんてこつた、墮龍の形になつたじゃないか。分身つてわけだ。
さすがに色までは変わらない土色だけど、形は寸分違わぬ墮龍だ。
それが、ジワリと前進してくる。

不気味な光景だけど、驚きはまだ続いた。前進した墮龍の後が、
また盛り上がったかと思うと、再び墮龍の形に変化する。こいつは、
際限なく出て来やがるってことか？ まったく、手が込んだ仕掛け
だこと。

でも、所詮は木偶だろ？ 叩き潰せば、それまでだろ。

魔力を貯めると同時に、手足に送る。貯めると使うを同時に行う
のは、本来はやつちやいけない。集中力が分散されるだけに、どち
らも中途半端になりやすいからだ。

だけど、今は四の五の言つてられる余裕なんてないちゅうの。い
つくぜえ〜。

背中の木を踏み台に、身体を半回転させながら、土墮龍に突進す
る。かなりの衝撃だつたけど、見事に粉碎した。ボロボロと土に還
る。あつたま、いつて〜けどね。

次、二匹目。

着地を右手一本で支えて、そのまま回転を加え二匹目に。

頭じゃ痛すぎなんで、今度は両拳を突き出す。粉碎…って思った

が、二度目はなかった。金属のような音と共に、あたしの身体が弾かれた。くっそ、金属を混ぜたか。

倒れこんだところに、上段から殺気が降り注ぐ。右に反転してかわしたところに、銀色に光る大型の刃物が打ち付けられた。

バック転で距離をとって確かめれば、二匹目の土墮龍が、長い尾を銀色の刃物に変化させて、不気味にくねらせていた。

その後ろ、四匹の土墮流が出来上がっていた。それぞれが、少しずつ形が違う。爪が以上に長い奴。頭に大きな角を持った奴。前進が針の山な奴。鞭のような手と尾を持った奴。こりや、一筋縄ではいかないか。はあ、溜め息しか出ないよ。でも、負けない！

武器には、武器。

腰に巻いていたベルトを引き抜く。一振りする間に、ありったけの魔力を叩き込む。甲高い悲鳴のような音と共に、ベルトは剣のような形に変化した。まあ、こういう魔力の使い方もあるってこと。っていうか、あたしの隠し技で、滅多にやらないんだよね。疲れるんだ、これ。

魔力を持続させるために、常に魔力を送らなきゃならないし、魔力を補充するのに貯めを常に行うことになる。それに、これを生かす身体能力も維持しなきゃならないから、魔力の量って半端じゃないんだよね。そう長い時間はもたない。

“くだらんな。小手先の誤魔化ししか出来ん高等魔術師とは。経験不足とは、罪に等しい”

ええい、後ろの方でぼんやりしてやがるくせに、いつちよまえに大口叩くなつての。

降りかかる刃物を弾いて、瞬時に懐に入り込む。下段から切り込んで肩口に抜けた。土塊に還るのを確かめないで、次の奴に向かう。頭に角を持った奴が飛び込んできた。あたしを串刺しにでもしようつてのか？ 左手でいなして、身体を反転しながら剣を振る。左下腹部から右肩に一線して、土塊に還す。

着地の瞬間を、他の奴は待ってなかった。全身針の奴が、総毛立

つよゆに身を震わせると、鋭い数千本の針が飛んだ。着地寸前だったあたしにかわすことは出来ない。剣を旋回させて、叩き落したものの、全ては無理だった。

右足と右肩に、数十本の針が刺さる。魔力のガードが無かったわけじゃないが、分散されている今は、完璧なガードは無理だ。

激しい痛みが走り抜ける。前転しながら抜き取ったものの、傷跡からは痺れのような痛みが残る。くっそ、毒でも入ってやがったか。動きが鈍くなったと思ったか、長爪の奴が飛び込んできやがった。なめんなよ。

左足で踏み切って、地面スレスレを飛ぶ。下から切り結んで、股から脳天に抜ける。土塊に還る半身を左手で突き飛ばす。狙いは、全身針の奴。土塊を隠れ蓑に飛び込んで、突き刺すと同時に振り上げる。

脳天まで真つ二つにされた針野郎は、眼の前で土塊に還る。これで全部。

そう思ったのが、あたしの甘えだったことに、後悔は間に合わなかった。

本物の墮龍は、この時を待っていたに違いない。

土塊に変わった針野郎の後ろから、あたしの腹部に鈍い痛みが走った。今まで地面を踏みしめていた両足が、空を蹴る。

「ぐはぁ」

という声と赤黒い液体が、口からこぼれた。

やっべく。内臓までいかれた。見れば、あの短い墮龍の左手が、あたしの腹部に深々と刺さっている。持ち上がったあたしの身体は無様にもジタバタするばかりだ。

極めつけは、眼の前に迫る墮龍の大口であろう。羅列に並んだ牙が、眼前に迫る。ちつくししょう、お前なんかの栄養になってたまるかっての。

顔を蹴り飛ばして、腹に刺さった爪から逃れたものの、地面に突っ伏したまま動けなかった。ホントは剣を振り回してやりたかつ

だが、魔力の消費は、あたしの予想より早かった。既に剣の形を保てなくて、ベルトに戻ってクタクタだった。

受けた傷が深すぎる。体液が流れ出す感覚が止まらない。あつという間に力が抜けていく。

なんてこつたい。動けない。仰向けになったまではいいが、そこから指一本動かない。視界もぼやけてはつきりもしない。くそ、ここまでか……。

墮龍が、地面を這う音が響いてくるが、逃げることにすら不可能だ。万事休すつてのは、こういうことだろうな。

ちつくしよう。短い人生だったぜ。それも、異世界での終焉つてのは、物悲しいやね。

覚悟は出来た。あばよ、楽しい世界。

つづく

第九話

ズリズリと地面を這う音が聞こえる。

くっそ！ 動けない！

痛みと体液の流れ出るので精神集中もできやしない。

“脆弱な生き物の末路とは、無意味に等しい。我ら龍の血族のような高等な種に比べれば、食物にしかならん。低俗な力と身に不相応な知能など、不恰好なだけだ。死して、己の無力さを知るがいい”

墮龍が話しかけながら近づいて来る。

うだうだうるさい。そんなこたあ、ここに来る前から判ってるちゆうの。経験値も知識も半端なあたしに、墮龍退治なんて無理に決まってるんだ。

でも、これからどうなる？ 墮龍は、あたしの力を食い物にすることで、今以上の力を獲得するだろう。となれば、ソロモン王の予測が外れている今の状況から、更に最悪なシナリオが用意されていることになる。

ソロモンの指輪を持っているあたしが居なくなるってことは、ソロモン王も、その他の墮龍に対抗しうる人間は、力を使えないことになる。

完全なる虐殺。人間界は、墮龍一匹の為に滅亡の危機ってわけだ。ははは。龍の血族最下位の奴が、世界をひとつ滅ぼすってのか。

笑い事じゃ、済まされない。

来たばかりの異世界だけど、嫌いな世界じゃない。ソロモンじじいのお蔭で、魔力も自由に使えない、自然との共存もできてない、空気も水も不味い世界だけど、食い物は美味いんだ。それに、理由のない死は、誰にも与えられてはならないんだ。

痛む身体を、無理やりに上半身だけ起こした。二の腕に力が入らないから、不恰好に斜めになったが仕方ない。

治癒魔法なんてのがあれば、こんな怪我だって治せるんだろうけ

ど、治癒の魔力は、未だ研究中で、そのやり方すら公表されてない。こんなことなら、親父にスパイさせてでも聞きだしとくんだった。

まあ、いいさ。やりようは、無いわけじゃない。

魔力を貯めると同時に、背中の真ん中に集め、一気に頭へと走らせる。一瞬、光が走り抜けたように見えたらう。

これで、やっと立ち上がれる。痛みは、ない。

流れ出る体液までは、止められないが、痛みは無くなった。一種の麻酔効果だな。脳の痛みを判断する部分を、一時的に麻痺させる。副作用としては、運動機能にも多少の影響があることと、致命傷の傷を受けたとしても、痛みで判断出来ないってこと。痛みが戻って、あつけなく死んじまうこともあるってことだよ。

今更、そんなこと気にしても、しょうがないけどな。

“……そこまで抵抗するか。愚かな者は、相手との力量さえも見誤るものか。延命にすらならんぞ。くだらん”

立ち上がったところに、ブンと唸りをあげて墮龍の尾が、横殴りにあたしを捉えた。

やっとのことで立ち上がったのに、あたしに防ぎようはなかった。

そのまま払うように吹き飛ばされて、木々の生い茂るところまで宙を舞った。

痛くはないけど、かなりの衝撃に身体が痺れる。

足から着地するべく、態勢を立て直しかけたところで、真後ろから衝撃がきた。予想すらしていなかっただけに、全身にかかるショックに視界が真っ白になりかけた。

後ろ手に確かめる感触は、物凄く堅く冷たいものであった。振り返って、青くなる。

あたしの三倍はあるうかつて巨石が、何時の間にもやら出現していた。こんな岩、さつきまで無かったはずだ。

岩に張り付く感じで動けないでいるあたしの眼の前で、驚きの続きは始まっていた。

岩が、地面からせり出して来る。いや、岩と呼べないくらいの石もだ。

変化は、それだけじゃ収まらなかった。迫り出した石や岩が、まるで地面から吐き出されるかのように、あたし目掛けて飛び出してくる。

小さい石を二、三個右手で払いのけたが、さすがにあたしの頭くらのサイズは無理だ。横っ飛びにかわすが、まるで予測していたかのように巨石が眼前に落ちた。バック転で避けたものの、空中は無防備になった。

四方から飛来する拳大の石は、身体を丸めたあたしの全身を叩いた。魔力で防ぐことすら出来なかった。というか、それだけの魔力が貯まってなかった。受身をとることすら出来ずに、あたしは、地面に叩きつけられるはずだった。

左肩と右太ももに、鈍い衝撃が走った。身体は、地面にまだ触れてない。

「うああああ！」

確かめて見て、自然と叫び声が出た。

地面から迫り出した槍のような岩が、あたしを空中に張り付けにしていた。痛みは、まだないが、決定的な状況に恐怖が叫び声として出たのだ。

すぐ傍らに、墮龍が右手を上げて待ち構えていた。絶望。墮龍の姿が、大きな鎌を振り上げる死神に見えた。

あたしの身体を、真つ二つにするべく振り下ろされた鉤爪が、あたしの腹に触れる瞬間、それは起こった。

「すみません、マミさん。少し時間を食いすぎましたね」

静かな調子で話す声と、鉤爪が空を切って通り過ぎるのが同時だったろうか。気が付けば、あたしの身体は、槍の岩から開放されて、空を飛んでいた。

その後を巨石が飛んで追う。その間を、難なくすり抜けて、あたしは地上に降りた。ありゃ？ 表現が変だな。あたしを抱きかかえ

た慎一郎が、降り立った。

「……しんいちろ……」

呆然とするあたしの口から、たどたどしく出た言葉。我ながら情けない。

「すいません。もう少し早く出来るはずだったんですけど、なかなか難しくて」

あたしを見下ろして、エへってな感じで笑う慎一郎は、頼もしいとは決して言えない。ってか、助けんなら、もっと早くだろが！

“脆弱な生き物が、一匹増えたか”

呆れたとでも言いたげな墮龍。真つ直ぐにあたし達を目指して進んでくる。と同時に、岩だらけだった地面が、墮龍の道だけ岩が沈んで綺麗になっていく。その他は、大小の岩だらけ。行動範囲が制限されているようなものだ。きつたねえの。

「脆弱は、言う通りですね。僕じゃ、ママさんみたいには、戦えませんが。さっきの石ひとつで死んじやいます」

うんうんと頷いてんじやないってえの。緊迫感のない奴だな。大体、ひ弱自慢してどうすんだ。馬鹿じゃない。

“ならば、何故に出てきた？ 逃げておれば、幾ばくかの延命はできたであろうに”

みる。突っ込まれたじゃないか。人間のお前に、墮龍とまともに戦うなんて出来ないんだから、逃げるってことが得策だったはずだろ。

何も助けに来ることなかったんだ。まあ、感謝はしてるけど。

“人間が何人増えようと、魔力を使えぬでは、下等生物だ。さあ、その娘を差し出せ。その娘を喰らい、我は最後の力の仕上げとしよう”

なぬ？ 最後の仕上げ？

「あああ。まだ、完全体では、なかったわけですか。どうりで聞き及んでいたほど敏捷ではないですし、力も感じられませんでした。後ろ足が無いのが、その証拠でしょうかね」

よいしょつとばかりにあたしを抱え直して、慎一郎は話す。失礼な奴だな。あたしは、そんなに重くないぞ。

「血です。血で、滑るんですよ」

睨み付けたあたしに気付いて、慎一郎が言い訳してきた。おいおい、そんな余裕あんののか？

“身体の一部が不完全であったとしても、貴様らのような脆弱な者に、何ら支障もあるまい”

高笑いすら聞こえそうな堕龍の自信であった。でも、それが嘘じゃないことは、あたしのこの姿が実証してる。

「あつあくん。自信過剰は、いけませんね。謙虚じゃないと、長生きできませんよ。まあ、あなたは、それにすら値しませんけど」

ふわりとあたしを抱えたまま、慎一郎は背中にそびえていた巨石に飛び乗った。あたしの倍はある大きさだ。

「それに、いつ、僕が人間だなんて言いました？」

“なに！”

堕龍の驚きが伝わるかどうかの刹那、その変化は一気に起こった。真っ白な霧に似たものが、堕龍を中心に渦巻きだした。それは、

あれよあれよという間に、堕龍を包み込むと、まるでデカイ繭のようになつてしまった。と同時に、あれだけ乱立していた岩群が、地上から消えつつある。慎一郎が乗っていた岩も、既に地面に吸い込まれて、土の地面を踏みしめている。

“な、なんだ、これは？ 眼くらましのつもりか！ 小ざかしい！”

「あなたには、見えないでしょうね。見ようともしないでしょっから。人間界といつても、人間だけが暮らす世界じゃありませんよ」

慎一郎は、あたしを静かに下ろして、地面に横たえた。実際、限界に近かったんだよね。体液は、流れっぱなしで貧血状態だし、麻酔効果も薄れつつあって、体中が痛みだしてる。静かにさせてもらえるなら助かる。

「これで、少しは時間が稼げます。マミさんが、止めを刺してください。僕には、できませんので」

あああ、そうかよ。って、なに!?

「おまえ、あいつに、さつさと止め刺せ！ イタタタっ」
しゃべらせるな。痛くなってるんだぞ。

「無理です。僕、攻撃魔術なんて習ってませんから」

「じゃあ、おまえ、何したんだ？ ってか、何できるんだ？」

頼むよ。瀕死のあたしに、これ以上突っ込ませるな。

「マミさんを治せます。今、だけですけど」

「なんじゃ、そりゃ？」

「説明してる場合じゃありません。いきます」

そう言つて、両手をあたしの腹部に押し当てて、慎一郎は眼を閉じた。物凄い勢いで慎一郎が光りだす。と、あたしの傷口が、見る間に閉じていく。暖かい感じはあるものの、これといった感触はない。

まさか、治癒魔術？ こいつ、異世界人か？

完全に傷口が塞がったのを見届けて、慎一郎はその場に座り込んだ。

「すいませんが、これで僕は動けません。後は、頼みます。恐らくですが、堕龍の弱点は、不完全な後ろ足だと思えます」

それだけ言つと、ぱったりと後ろに倒れて動かなくなった。

まったく、中途半端に凄い奴だよ。未だ実用化されていない治癒魔術を使えるなんて、上級魔術者でも数人だろ。

後で、その正体、白状させっからな。

あたしは、勢い良く立ち上がると、静かに息を吸い込んだ。ゆっくりと眼を閉じる。

二度、大きく深呼吸をして、ゆっくりと眼を開けた。見えなかったものが、しっかりと見えるようになった。

あたしと慎一郎の味方。それは、堕龍を渾身の力で閉じ込め、今も身動き出来ないようにしてくれている。

ありがとう、みんな。

さあ、ここからが、反撃の始まりだぜ！

「いつで生まれたことを後悔させてやる。覚悟しろ！」

へっへっ

第十話

あたしと慎一郎の味方。

それは、何十、何百という数で、墮龍の廻りを飛び回り、口から霧のような糸を吐き出して動きを止めてくれている。

どの世界にも存在する、自然の中に溶け込み暮らす妖精と呼ばれる種族だ。

時に悪戯もするが、いつもは木や草、水や土の中に暮らしている。滅多なことでは出てきてくれないが、完全に心をシンクロさせて呼びかけられれば、こうして出てきてもくれるんだ。

シンクロ。言葉では、簡単に聞こえるが、実際には、物凄く難しい。

億って数から、たった一つの数を抜き出す作業に等しいし、たとえシンクロ出来ても、相手が答えてくれないければ、それまでの苦労すら水の泡だ。

それを、こんな短時間で可能にし、治癒魔法さえ使える慎一郎って……。

妖精たちの力は、単純だけど絶対的に強い。

あの口から吐き出される糸状の霧が、魔力や、それに伴う現象を完全に無効化してしまう。視界も奪われるし、数がまとまれば動きさも止められてしまう。

自然と完全共存するからこそ出来ることらしいけど、四大元素の力にまで対応してしまうなんて、脱帽以外の何ものでもないね。

さて、終わらせていただきますか。

“おのれ！ 雑物の力か！ 完全体であれば、このような侮辱を受けぬものを！”

あははは。そいつは残念。ただ、その根拠も怪しいもんだけどな。辺りを見渡して、さっき落としたベルトを見つけた。

勢い良く振りぬいて、土塊や草を落とすと同時に、剣の形へと変える。

やっぱり、手に馴染むものは、いいねえ。

“このような時間稼ぎが、いつまでももつと思うか！”

ありやいや？ ちよつとヤバイか。膨れ上がった墮龍の繭が、ジリジリと動き始めてる。限界が近いってことだろう。

その証拠に、妖精たちが聞こえない悲鳴を上げながら、少しずつ消えて行く。

すまない。もう少し、がんばってくれ。

大きく息を吸い込んで、両手を広げる。今度は、急激に魔力を貯めるのでは無く、ゆっくりと時間を掛けて貯め込む。

全身が熱を帯びるように熱くなる。これが、いつものあたしの臨界点くらい。これだと身体は光らないし、能力自体もそれほど大きくはならない。さっきまでのことくらいが関の山。

けど、ここからが真骨頂だよん。

更に、腕を縮めて、顔の前まで持つてくる。必要はないんだけど、何か集中するためのポーズみたいなものかな。

身体が光りだす。さっきのような光り方じゃなく、ポウっとした青い光。そこから、鮮明な青になり、白い光になる。

まだまだ、足りない。墮龍を相手にするなら、この倍はないとな。白い光が、球体のようにあたしを包み、徐々に赤色に変化していく。灼熱色になるのも、そう時間はかからないだろう。

本当の臨界点は、あたしにもわからない。ただ、これ以上だと、身体がもたない。

貯め込んだ魔力を、身体を中心に凝縮して、右手から剣に流し込む。神々しいまでに光りだす剣は、あたしの魔力を紡いだ糸で出来てる。それじゃなきゃ、これほどの魔力を流せない。

“貴様！ 何をする気だ！ 巨大な魔力の気配がする。 貴様！ 高等魔術を使う気か！”

ちよつと、時間食っちゃったせいで、墮龍の姿が透けて見える。

ってことは、あたしのこともあつちから見えてんかなあ。

おいおい、後ずさるなよ。みっともないよん。不完全体でも、龍の血族だろうが。往生際は、綺麗でなきゃな。

ぐるりを飛び交う妖精たちは、既に半分以下だろう。その子達に目配せしながら、墮龍の前に仁王立ちする。

“ 寄るでない！ 寄るでない！”

残念だが、そうはいかない。ここでお別れだぜ。

「悪いけどな、自然とも人間とも生きられないお前に、この世界での居場所はないんだよ。次は、自分の世界で生まれるんだな」

光輝く剣を振りかぶり、剣先を墮龍の足元に突き刺す。と同時に、妖精たちの繭が四散する。

剣に貯めた魔力と、あたしの中に残った魔力を足して、一気に墮龍の体内に送り込む。

ポコポコと墮龍の半身が、いくつもの瘤状に膨れる。

剣を引き抜いて、後ろへ飛んだ。かなりの距離をとったつもりだったけど、魔力自体が底をついていたらしい。大して飛んでなかった。

“ こんなことで 龍の血族は 自然の摂理に 従わぬ生き物 故に 生きる世界を追われた者 真龍の目覚めも近い 無駄な生き延びは ”

聞き取れたのはそこまでだった。

ポコポコと全身を瘤状に膨らませたかと思うと、爆発するかのようになり身体が裂け、四方へと飛び散った。

その肉片が地面に落ちる前に、それらは全て炎に包まれ灰となった。

妖精たちが、元の木々や草の奥へと消えていく。

墮龍を倒した。

疲れたっていうより、満身創痍ってところかな。慎一郎が治してくれたとはいえ、身体のおちこちが痛む。

大きく息を吐き出して、あたしは前のめりに倒れかけた。体制を

立て直そうとしたけれど、うまく腕も足も動かなかった。

そのまま地面とこんにちわして、ぼうつとする頭で考えた。

あたしって、結構強いんかな？

そのあと、あたしは、気絶したらしい。真つ暗な視界に意識までが吸い込まれた。

あたしが眼を覚ましたのは、どうやら建物の中らしい。

記憶が無くなる前までの草木は、どこにも見当たらない。変わりに、フカフカの布団の中だった。

半身を起こそうとしたけれど、どうにもうまくいかなかった。なんだか、全身の力が抜けたみたい。

「無理ですよ。あんなに魔力を貯めたこと、無かつたんじゃないですか？ 相当な負担が身体に掛つたんです。当分は満足に動けないでしょうね。一種の筋肉痛みたいなものです。ゆっくりと休んだほうがよろしいですよ」

ん？ 足元のあたりで声がする。

慎一郎の声みただけで、首すら動かないから確かめることすら出来ない。くっそ。

そういえば、小さい頃もこんなことがあつたような。

小さい石を飛ばす練習中だったかな。徐々に大きくしていく過程をすつ飛ばして、一気に巨石を浮かせた。そこまでは覚えてる。その後、もっと大きいものにチャレンジしたはずが、気付けばベッドで寝かされていて、結局のところ五日も満足にベッドを降りれなかった。

記憶も無いし、親父や母さんも何ひとつ教えてくれないしで、記憶の彼方に追いやつてたなあ。まあ、どうでもいいけど。

「お腹空きましたか？ 何か持つてきましようか？」

やっと慎一郎が、あたしの顔を覗き込んできた。顔が見られた。

どうやら、慎一郎には、怪我をしてるようには見えない。よかつ

た。あれだけ苦勞したのに、慎一郎に怪我のひとつもあつたら、何のための死闘だったやら。

「あれ？ マミさん。泣きそうですか？ 眼が赤いですよ」

ば、馬鹿言つてんじやないよ！ 泣くわけないだろ。大体、理由が無いっての。泣く理由が。

「どうやら、目覚めたようじゃの」

また、足元で声がした。ははん、じいさんか。よゝし、よゝし。どうやら、約束を忘れてなかったようだ。

「お若いの。少し、お嬢さんと話したいんじやがの」

「どうぞどうぞ。僕は、マミさんに、何か食べる物を買ってきますんで」

まったく、慎一郎も役者だよ。あたし同様、異世界人だつてのに、じいさんを騙してるつもりなのか、それとも、お互い騙しあつてるつもりなんだか。

「どうやら、わしとの約束は、果たしてくれたようじゃの。お礼を言う。これで、この世界は、とりあえずは、安泰じゃ。本当ならば、この世界全てで祝福を与えたいが、そうはいかんのがこの世界。済まん」

あたしの枕元まで来て、あたしの顔を覗き込んでから、どうやらベッドの脇に置かれた椅子に腰掛けたらしい。木製の軋む音が、小さくした。

「別に いいよ」

ありや、声は、何とか出る。悠長に喋ることは、可能かどうか怪しいけど、話せるってのは、助かる。

「お嬢さんが、これほどの働きをしてくれるとは、正直なところ、期待してはいなかったんじやの。墮龍は、強い。恐らくは、この世界での発見時には、十分な力を付けた後であろうと予測していたんじや。完全な身体であつたなら、ベリアルでさえ敵わかつたであろう。そうなつては、時間が欲しい。お嬢さんには、悪いと思つたんじやが、お嬢さんが相手をしてくれている間に、暗黒の穴を開け、

そこに落とし込まうと思っておった。じゃが、お嬢さんは、自らの命をも賭して墮龍と戦い、勝利してくれた。わしは、何と言って詫びたらいいいのか、わからんくらじゃ。感謝する」

深々と頭を下げる気配がする。くっそ、直に見れないのが口惜しい。あの高慢ちきなじいさんが、あたしに頭を下げるなんて、これ以上の御褒美なんてないのに。

まあ、でも、いいか。

「 気にすんなよ　きつと、あたしが、じいさんでも、同じだつたろうから　」

「 そう言ってもらえると、気が楽になるの。じゃが、納得がいかなこともある。お嬢さん、なぜに逃げなんだ？　命を掛けるとまでは、わしは言っただけなの」

なんだよ。そんなだけなのか、感謝の気持ちってのは。悲しいくらい素早い変化だよ。

「 逃げるって選択も有りだったけど　なんか悔しくってね　逃げてるのは」

お？　段々といい具合に喋れるようになってきたじゃん。でも、身体は無理っぽいな。目玉くらいしか動かない。

「 それにしてもじゃ、あのままでは、確実に命を落としておったぞ。異世界で死ぬのは、本望ではないじゃろの」

「 どこで死んだってのが重要なら、そうかもな。けど、いつ死ぬかかってのなら、あたしには、あの場所でも構わなかったのかもな。死んでないけど」

じいさんは、あたしのセリフに大きな溜め息で答えた。呆れてるのかも知れない。

んなこたあ、どうでもいいんだ。今は、それより神聖魔界への出口。これが、あたしの目的だったんだから。

「 じいさん。約束だ。出口を教えてもらうよ」

「 おおお、そうじゃったの。この世界での異世界への入り口は、簡単には見つけれん」

「へ？」

「定まった出入り口が無いのじゃ。ようは落とし穴みたいなものでな。時折、ぼつかりと口を開けるんじゃ。そこに落ちる人間は、非常に運が悪い。お嬢さんには、運が良いってことじゃろうかの」

笑いながら言うてのけるじいさんだけど、それって…。

「詐欺だ！ 教えるって条件だったぞ！」

身体さえ動けば、首根っこひつつかまえて、引きずり回してやるとこだけど、今のあたしには不可能だ。ちくしょう。口惜しい。

「詐欺ではないの。ちゃんと教えたいじゃ。ただ、見つけるのには、骨が折れるっただけじゃ」

「じゃあ、このまま帰れないってことと同じじゃねえか」

「そうとも言えん。道が開くにも、それなりの条件があるんじゃ。

この世界では、月の満ち欠けが、異世界の道に深く関わっているのじゃ。満月と新月のどちらかに、必ず道は開く。その時に、その道を探せば良い。必ず、どこかの世界に通じるはずじゃ」

はあ、溜め息が出るね。それって、場所は特定出来ないってことじゃん。つまりは、満月と新月になる度に、どこにあるかもわからない入り口を探して、この世界を駆けずり回ってことだろ。

「そう、悲観するでない。道は、ひとつだけ出来るわけではない。

二つ、三つと出来ることもある。この街でも、数回に一度は、必ず道が開くのじゃ。それまでは、この世界を楽しむんじやの。わしは、そろそろ行かねばならん。墮龍の後始末があるぞ。お嬢さん、もう一度言わせてくれ。ありがとう」

そう言うてじいさんは、いそいそと立ち上がって歩き出ししまった。あたしの『おい』とか『ちょっと』とか言う言葉には、耳も貸さずに部屋を出て行った。

くっそ、あのじいじい。動けるようになったら覚えてろ。

入れ替わりに慎一郎が入ってくる気配がした。

「おい。お前。何者だ？ 人間じゃないよな。あの時の治癒魔術は、例え神聖魔界の高等魔術者でも不可能な勢いだ」

あたしの言葉に、少したじろいだような気配がしたが、それもつかの間で、慎一郎は、あたしの枕元までくると、今までじいさんが座っていた椅子に腰掛けたようだ。

「いやですねえ、マミさん。あの時、言ったでしょう。今しか出来ないって。それに、マミさんのことは、おじいさんに聞いてましたし、驚くことでもありませんでした」

ん？ 何、わけわかんないことのたまってたんだ？ とぼけるにもほどがあるぞ。

「いい加減にしろよ。お前が、異世界人つてのは、この世界で魔術使ったり、妖精たちを呼び出したりしただけでもはつきりしてんだよ」

「あれは、おじいさんがやったんですよ。僕なんかが、出来る芸当じゃありません。おじいさんが、僕の身体を使ってやったんです」

ああ、嘘もここまでくるとウザイの通り越して呆れるよ。あのじいさんの言葉を聞いてなかったのかね。

じいさんは、四大元素の力で強かったんだ。決して魔術を使える人間じゃなかった。だから、ベリアルを下部にして魔術を駆使させたんだろ。って、説明すんのもめんどくせえ。

「それよりマミさん。動けないでしょ？ これから食事とかトイレとか大変じゃないですか。それに、さっきのおじいさんのやりとりからして、すぐに自分の世界に帰れないみたいですし、当分は僕のところまで暮らしませんか？」

ぐっ。痛いところをついてくるじゃないか。慎一郎の分際で。

でも、この世界で暮らすってことは、ネグラを確保するってのは、死活問題だしな。慎一郎の申し出を受けるってのも、それはそれでおいしいのかも。

「まあ、仕方ないしな。当分、厄介になるよ」

「そうですか。では、これからは、マミさんは、僕の助手ってことで、よろしくお願いしますね。あ、でも、家賃くらい払ってもらわないと困りますよ」

「あ？ やちんって何だ？」

「ここに住むにあたっての対価ですかね。って、言ってもマミさんは、お金を持ってませんよね」

お金って、あの物をもらう時に出す紙だの金属の丸いのだとかだる。持ってるわけないじゃん。

「じゃ、家賃は、これで…」

！！！

てめえ！！ 何しやがる！！

「こんのやるうー！」

これですって言って、慎一郎の奴、いきなりあたしの唇を奪いやがった。

一瞬のことだったし、あたし動けないし。とにかく、卑怯極まりないっての。

「まあ、まあ。これで家賃ってことでいいでしょ。あれ？ まさか、初めてだったとか？」

「ば、ばかいつてんじゃねえよ。ってか、てめえ。動けるようになったら覚えとけよ」

あれ？ さつきも同じこと言ってなかったか？

「顔、赤いですよ。マミさん」

うっせい。熱でも出てきたんだろ。ちくしょう。

「腹減った！ てりやき、食わせろ！」

照れ隠しじゃねえぞ。腹が減ったんだかな。

「わかりました。買ってまいります」

走り出て行く慎一郎の足音を聞きながら、あたしは、深い溜め息を吐いた。

結局、帰るってことには、ならなかった。それに、墮龍の最後の言葉。

いやに重々しく、あたしの耳に残ってる。『真龍が目覚める』って言うていた。

考えたくないようなことだけれど、もし真龍が、墮龍のような、

他の生き物に敵意を抱いた生き物だとするなら、途方も無い力は、何処に向けられるのだろうか。

まあ、あたしには、関係ないか。

今のあたしが気にしなきゃなんないのは、家賃と称して慎一郎の奴が、あたしの唇を奪いに来るってことの方が重要だ。

けど、それも悪くないって思ってる自分も、少なからず存在してるってのは、あたしもどうかしてるのかな？

おわり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7536c/>

夢幻妖女

2010年10月8日14時48分発行